

加藤清正の実像

(1) 誕生

加藤清正は、永禄5年(1562)6月24日、加藤清忠の二男として尾張国愛知郡中村(現在の愛知県名古屋市中村区)に生まれたとされています。幼名は夜叉若、元服後は虎之介清正。母の名前は伊都。「美濃国諸家系譜」の「加藤清正系図」を見ると、牛之助という兄がいたようですが、ほとんど知られていないため早くに亡くなったのでしょう。

また「清正記」※に収められている「清正系図」によれば、もともと加藤氏は藤原鎌足^{かま たり}を初代とする藤原氏の流れを汲む家柄で、鎌足から数えて42代目にあたる正家の時に京都から美濃国(現在の岐阜県)加藤庄に移り住んだことにより、加藤姓を名乗り始めたと言われています。そして、正家から数えて10代目にあたる頼方^{より かつ}が尾張国愛知郡中村に移り、この頼方の孫が清正の祖父にあたる清信^{きよ のぶ}です。祖父清信や父清忠の生没年や経歴については、はっきりとしたことは分かっていません。一説には、祖父清信は斎藤道三に、父清忠は織田信長に仕えたとも言われていますが、仮に事実だったとしてもどのような身分だったかは定かではありません。その後、父清忠は足を悪くしたため武士を辞めて清兵衛という鍛冶のもとで修行し、そこで出会った清兵衛の娘伊都和夫婦になったと言われています。

しかし、これらの伝記や系図は、後世に作成されているため年代など所々つじつまが合わない箇所があり、記載されている内容の真偽については疑問が残ります。特に、初代藤原鎌足から42代目正家あたりまでの系図は、加藤氏の由緒を粉飾^{おんしよく}するために創作されたと考えて間違いはないでしょう。つまり、加藤氏の素性^{す じよう}や由緒、清正の幼少期に関しては、信頼できる確かな史料が残されていないため、不明な点が多いと言わざるを得ません。

このように多くの謎に包まれた清正の幼少期ですが、当時織田信長の家臣となっていた同郷の羽柴藤吉郎秀吉(後の豊



▲清正生誕地
(名古屋市中村区妙行寺)



臣秀吉)に幼くして仕え始めたことは確かなようです。一般的には、清正の母伊都和秀吉の母なかが従姉妹の間柄であった縁で秀吉に仕えたと言われていますが、これを裏付ける当時の史料はなく、鵜呑みにはできません。また一説では、伊都和秀吉の妻ねねが縁戚関係だったとも言われていますが、これも決め手を欠きます。

幼くして父を亡くした清正は、母に連れられて当時近江国長浜(現在の滋賀県長浜市)にいた秀吉のもとを訪れたと言われています。これについて「加藤家伝」という伝記には「虎之助九歳。母二従テ江州長浜二到リ」と記されています。清正9歳は元亀元年(1570)にあたります。この頃秀吉は、長浜(当時は今浜)から少し離れた横山城^{お だに}や小谷城に在城しているため、9歳の清正が身を寄せたのは小谷城だったかもしれません。また、秀吉が今浜に本拠を移し、長浜と改めたのは3年後の天正元年(1573)頃ですので、長浜時代の秀吉に仕え始めたとするならば、清正が12歳以降の頃だったと考えられます。

いずれにしても、清正が10代の少年期を秀吉のもとで過ごしたことは間違いなく、これによって秀吉配下の武将として立身出世^{りっ しん しゅっ せ}の道がスタートします。

※「清正記」…古橋又玄^{こはし また げん}がまとめた清正の一代記。清正の死後、約50年経った1600年代の中頃に書かれた。

このコーナーは、大浪 和弥^{おなみ かず や}さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。

加藤清正の実像

10歳前後で羽柴秀吉(後の豊臣秀吉)に仕え始めた加藤清正は、10代の少年期を秀吉の本拠地である近江国長浜(現在の滋賀県長浜市)で過ごしました。しかし、残念ながら長浜時代の清正の活動を伝える当時の史料はほとんど残されていません。今回は、伝記資料を中心に10代の頃の清正について見ていきます。

〈2〉長浜時代

北近江の戦国武将・浅井長政を攻め滅ぼした功績により、織田信長から浅井氏の旧領を与えられた秀吉は、天正元年(1573年)頃から長浜に本格的な城郭と城下町の建設に着手しました。自身初めての居城であったため、この頃に秀吉は、名実ともに信長配下の武将としての地位を確立したと言えるでしょう。このように秀吉が長浜に城と城下町を建設し、信長の重臣として台頭してきた時期に清正は秀吉に仕え始めました。ちなみに、秀吉は本能寺で信長が自害する天正10年まで長浜を本拠地とし、翌年には大坂城の築城に着手するなど、本拠地を長浜から大坂に移しました。これに合わせて清正も、長浜から大坂に移り住んだと考えられます。

さて、長浜時代の清正について、後世に書かれた「清正記」には、どのように記されているのでしょうか。それによれば、清正が15歳になって元服した時、秀吉が「加藤虎之助」と名付けて、170石の領地を与えたと記されています。しかも、その後、長浜城下で乱暴者を召し捕った褒美として200石を加増されています。また、「加藤家伝」という伝記にも「虎之助十五歳、落前髪、虎之助清正ト称シ、初メテ采地百七石ヲ領シ」と記されています。このように今までの通説では、15歳で虎之助(または清正)と名乗り始め、秀吉から170石の領地を与えられたと理解されてきました。しかし、これらについては、それを裏付ける当時の史料が残されていないため、後世に創作された可能性も否定できません。領地に関して現在確認できる確実な史料では、清正が19歳の時に秀吉から近江国に120



▲昭和58年に再建された長浜城
(長浜城歴史博物館提供)

石を与えられるのが初見ですので、それ以前に15歳の少年に対して170石を与え、さらに乱暴者を召し捕った程度で200石を加増するとはとても考えにくいのです。それに、肝心の領地の場所が不明ですので、やはり後世に創作されたと見るべきでしょう。

名前にに関して言えば、伝記資料や現在のほとんどの本には「虎之助」と書かれていますが、当時の史料には「虎介」と書かれています。秀吉が清正に出した手紙の宛名は「虎介」ですし、また清正自身も「虎介」と名乗っていますので、正しくは「虎之介」と表記するべきなのかもしれません。ちなみに、清正20歳前後の花押(サイン)は「虎」の上の部分と「介」の文字を組み合わせたものを使用していました。

以上のように10代の清正の様子については、後世に書かれた伝記資料しか頼るべき史料が残されていないため、史実とは言い難い内容も多く含まれているようです。清正は19歳頃まで戦に出た形跡がないため、それまでは羽柴家の家政向きの仕事に従事していたものと思われます。

清正の名前が確かな史料に現れ、歴史上に登場するのは、彼が19歳の時、天正8年まで待たなければなりません。

加藤清正の実像

天正4年(1576)、織田信長は中国地方の毛利氏を攻めるため、羽柴秀吉に中国攻めを命じました。これより秀吉は、信長が本能寺で斃れる天正10年まで中国攻めに忙殺されることとなります。この中国攻めが、清正にとって出世の足掛かりとなりました。

〈3〉初陣

秀吉の生涯の中で最も明け暮れた中国攻め。秀吉は苦戦しながらも播磨国、但馬国を次々と勢力下に組み込みながら兵を西へと進めていきました。10代後半だった清正は、当初より秀吉の中国攻めに従軍した可能性もありますが、天正9年の鳥取城攻め以前については残念ながら史料上では確認することはできません。不明な点が多いこの時期の清正ですが、中国攻めの最中の天正8年9月19日、初めて秀吉から近江国神崎郡内(現在の滋賀県東近江市)に120石の領地を与えられています。確実な史料上で清正の名前が歴史に登場するのはこの時からです。この時清正19歳。ようやく秀吉から一人前の家臣として認められた重要な史料です。天正8年9月と言えば、秀吉による第一次鳥取城攻めの直後にあたります。時を同じくして秀吉から領地を与えられているということは、清正はこの戦で何らかの戦功を挙げたのかもしれませんが。

さて、鳥取城主・山名豊国の降伏により因幡国を手中に収めつつあった秀吉ですが、豊国の旧臣たちはいまだ鳥取城に籠城し、秀吉に対して徹底抗戦の構えを見せていました。しかも毛利氏の有力家臣であった吉川経家とその軍勢が籠城に加わったことで、秀吉は鳥取城の攻略作戦を練り直します。こうして天正9年6月より第二次鳥取城攻めが始まります。秀吉自身が後年「鳥取の渴殺し」と呼んだ日本史上最も凄惨な兵糧攻めが展開されました。4か月におよび籠城戦も吉川経家の切腹で幕を閉じ、秀吉は因幡国を平定しました。前に見たように、前年に120石の領地を与えられ、正式に秀吉の家臣に加えられた20歳の清正は、秀吉に従い、この戦いに参加したものだと思われます。これら一連の鳥取城攻めが秀吉



▲鳥取城跡(鳥取市東町)



家臣として清正が体験した初めての戦だったと言えるでしょう。

この時の鳥取城を攻めた際のエピソードが「清正記」に書かれています。それによれば、清正は蜂須賀小六と2人で城の物見に出掛けた際、20人ほどの敵兵に囲まれながらも1人の首を討ち取り、無事帰陣して秀吉を大いに喜ばせたというものです。感心した秀吉は、ひとすくいの砂金と次の感状*を清正に与えたと言われています。

少し読みにくいかもしれませんが、書かれている内容を簡単に言えば、敵兵を倒したことを秀吉が褒め称えて、その褒美として領地を100石加増するというものです。これについては、まず原本が残されていないこと、当時秀吉が発給したほかの感状に比べるとやや不自然な文章、さらにこの後100石の領地を与えられた形跡がないことなどを考えると、この感状は後世に創作された偽文書*の可能性が高いです。こうなると蜂須賀小六と物見に出掛けた話も信憑性に疑問が残ります。しかし、いずれにせよ清正は、この鳥取城攻めを契機として以後秀吉の戦争に本格的に従軍し、その働きぶりを認められて武将として出世していくことになります。

因幡国鳥取之城、為可責崩著陣、為物見遣刻、伏兵起候処、以半弓敵射退、其上太刀打之高名、誠以神妙之至也、因茲為加増百石宛行畢、弥於抽軍忠者可加増者也、仍如件
天正九年六月廿九日 秀吉 御判
加藤虎之助殿

▶秀吉からの感状

*感状…合戦などで戦功を挙げた者を褒賞するために発給された文書
*偽文書…家の由緒や歴史を装飾するために後世に偽造された文書

このコーナーは、大浪 和弥さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。

加藤清正の実像

はり まのくに たじまのくに いな ばのくに
 播磨国・但馬国・因幡国3か国を平定した秀吉軍は、さらに兵を西に進め、毛利氏の東の
 防衛ラインである備中国(現在の岡山県西部)へ侵攻します。秀吉は主君・信長の天下統一
 戦争を着実に遂行していきました。

〈4〉秀吉の天下取り

中国方面の平定を任されている秀吉は、天正10年(1582)に入ると備中国攻略に取り掛かります。4月14日には備中国に向けて軍を進め、5月初旬にかけて毛利氏の「境目七城」と呼ばれる軍事拠点^{あし い}を次々と陥れます。残すは清水宗治が守る高松城。こうして「水攻め」で有名な高松城の攻防戦が開始されます。5月7日に高松城を包囲した秀吉軍は、近くの足守川^{あし もり がわ}を堰き止め、その水で城の周囲を水没させて城を孤立させる兵糧攻めをおこないます。結果として6月4日に清水宗治が降伏したことで高松城は秀吉軍の手に落ちますが、実は前日の夕方に秀吉は、自身の運命を大きく変えることになる大事件の知らせを受けていました。6月2日未明に京都で起きた本能寺の変です。変の知らせを受けた秀吉は、毛利氏陣営が変の情報をキャッチする前に講和を結び、毛利氏撤兵後の6日に軍勢を率い上方方面に急行します。世に言う「中国大返し」です。2万を超える秀吉軍は驚異的なスピードで進軍し、200キロあまりの距離をわずか6日間で踏破したと言われています。6月12日に畠田^{とん だ}(現在の大阪府高槻市)に到着した秀吉は、池田恒興や高山右近らと軍議を開き、翌日夕方より山崎(現在の京都府大山崎町付近)で明智光秀軍との戦端が開かれました。この山崎の戦いは、圧倒的な兵力を誇る秀吉軍の圧勝に終わり、これにより秀吉は、信長亡き後の天下取りレースで頭一つ抜け出します。

さて、ここまで本能寺の変前後の秀吉の動向を見てきましたが、清正の動向にも目を向けてみましょう。先の「境目七城」の一つ冠山城^{かんざりやまじょう}を攻めた際、清正は一番槍の高名を挙げ、秀吉から感状^{かんじょう}を与えられています。「清正記」などの伝記類にし

ばしば引用されているこの感状ですが、日付や文章を見ると明らかに偽文書だとわかります。しかし偽文書とはいえ、清正が秀吉に従い、備中攻めに参戦したことは間違いないでしょう。また、江戸時代中頃に成立した「絵本太閤記」というイラスト入りの読み物には、「中国大返し」での秀吉と清正のエピソードが見られます。一刻も早く上方へ戻りたい秀吉は、1人軍勢を飛び出します。近習^{きんじゅう}※の清正や福島正則らは、懸命に追い掛けますが秀吉を見失ってしまいます。その後秀吉は敵方の兵から逃れるため、頭を丸めて僧侶^{ぶん}に扮し、とある寺院に身を隠します。ようやく秀吉の所在^{あつ け}を突き止め、秀吉に面会した清正らがその姿を見て呆気にとられるシーンです。秀吉の剽軽さを誇張するための創り話ですが、清正が秀吉の「中国大返し」に従って上方へ駆け上ったことは確かでしょう。

秀吉の天下取りにとって大きなターニングポイントとなった天正10年。もちろん秀吉に従う清正にとっても自身の将来を左右する激動の年でしたが、残念ながら清正の詳しい動向については不明な点が多いです。20歳を過ぎたとは言え、まだまだ部隊を率いる武将と呼べるほどの地位にはなく、秀吉が抱える近習衆の1人に過ぎなかった清正の名前は、当時の史料にはなかなか見出せません。

伝記や小説の世界ではこの時期の清正について、多くの逸話が語り継がれていますが、どれも当時の史料に基づいたものではなく、後世に創作された話のようです。

※「近習」…主君のそばに仕える者

このコーナーは、大浪 和弥さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。



加藤清正の実像

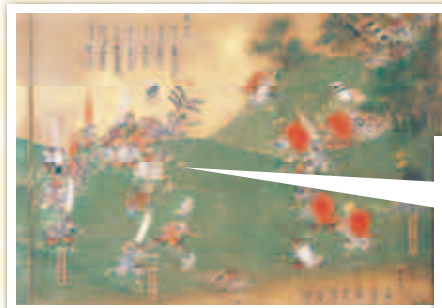
信長亡き後、その後継者を決める清洲会議を経て、主導権争いを巡って秀吉は柴田勝家との対決姿勢を鮮明にしています。そして、決戦の舞台は琵琶湖北部に位置する賤ヶ岳へと移ります。

〈5〉 賤ヶ岳の戦い

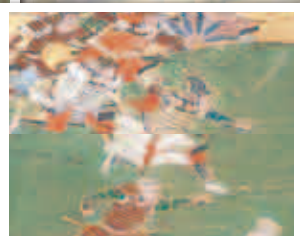
天正10年(1582)6月の信長後継者を決める清洲会議で、柴田勝家は信長の三男・信孝を、秀吉は信長の孫で当時3歳の三法師(後の秀信)をそれぞれ擁立します。会議に同席した池田恒興や丹羽長秀らが秀吉に賛同したため、ひとまず後継者は三法師に決定しました。しかし、これを不満とする勝家・信孝陣営は反秀吉勢力を取り込みつつ秀吉包囲網を形成し、これに対して秀吉陣営も独自に軍事行動を開始させ、勝家陣営の各城を攻撃するとともに自陣の勢力拡大を図りました。これにより両者の軍事衝突は決定的となりました。

年が明けて天正11年2月、ついに勝家は軍勢を率いて雪深い居城・越前北之庄城(現在の福井市)を出陣し、秀吉軍と対峙すべく南下を始めました。その頃、秀吉軍は勝家に与する滝川一益の領地である伊勢地方(現在の三重県)を攻めていましたが、勝家出陣の知らせを受けると急遽軍勢を琵琶湖方面に向かわせました。こうして3月半ばに両軍勢は琵琶湖北部一帯に布陣し、しばらく膠着状態が続きましたが、4月20日に柴田軍の先制攻撃で戦が始まります。この時、秀吉は織田信孝を討つため大垣(現在の岐阜県大垣市)に在陣していましたが、両軍衝突の急を聞かや否やすぐに兵を引き返し、戦場へ急行しました。前年の「中国大返し」に劣らない素早い軍事行動を見せた秀吉の軍勢は、大垣から木之本(現在の滋賀県長浜市)まで約50kmの道程を4時間で走ったと言われています。

さて、これまで合戦に至るまでの過程を見てきましたが、この時期における清正の行動を見ていきましょう。賤ヶ岳の合戦における清正と言えば、後世伝えられているように



▲賤ヶ岳合戦図屏風[右隻・賤ヶ岳七本槍部分]
(大阪城天守閣蔵)



▲槍をふるう清正

「七本槍」の1人として槍を振るって戦場を駆け回る勇猛な姿を思い浮かべますが、「志士清談」という後世に書かれた史料には、大垣から木之本に急行する強行軍を裏で支えた清正の姿が描かれています。それによれば、清正は秀吉に命じられて近江国中から倍の利息で金銀米銭を借り集め、木之本まで5万人分の食糧を用意したと書かれています。大垣撤退から木之本到着までわずか1日余り。この短時間で5万人分の食糧を準備したとは到底考えられず、この史料の記述を全面的に信じることはできませんが、物量で敵を圧倒する秀吉の戦争スタイルを考えると、柴田軍との決戦を見据えた秀吉が、かなり早い段階で清正に食糧やそのほか合戦に必要な物資の手配を命じていた可能性があります。

後年、秀吉が清正に与えた役割や清正自身の活動を見ると、このような補給業務に携わる清正の姿は、必ずしも史実と大きくかけ離れているとは思えません。合戦において清正が諸物資の調達や金銭の算用など後方支援的な活動をおこなっていた実態は十分にあり得ます。むしろ、清正はそのような能力を秀吉に買われて出世していった節もあり、後の清正の書状には経済活動に関する内容も多く見られ、金銭に細かい人物であったことがうかがい知れます。経済を重要視した秀吉の影響が大きかったことは間違いのないでしょう。

このコーナーは、大浪 和弥さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。

加藤清正の実像

清正の名を天下に知らしめた天正11年(1583)の賤ヶ岳しずがたけの戦い。この合戦を境に、ようやく確かな史料の中に清正の姿がうっすらと浮かび上がってきます。では、その後の清正について史料をもとに見ていきましょう。

〈6〉清正の出世

賤ヶ岳の戦いでの清正と言えば、いわゆる「七本槍」の1人として有名ですが、当時の史料には、その姿についてどのように書かれているのでしょうか。秀吉の側に仕えていた大村由己おおむら ゆうこが合戦直後に著した「柴田退治記」という比較的信頼のおける史料しば た たい じ きの中に、先頭を切って敵陣を突破した「近習之輩」の1人として清正の名が見えます。この「近習之輩」には、清正のほかには福島正則ふくしま まさのり、脇坂安治わきさか やすはる、加藤嘉明かとう よしあき、平野長泰ひらの ながやす、片桐且元かた ぎりかつもと、糟屋武則さす や たけのり、桜井左吉さくらい さきち、石河一光いし ひと かずみつの計9人の名前が挙げられています。「七本槍」とよく言われますが、実際には9人いたことがわかります。残念ながら、清正が誰をどのように討ち取ったのかという具体的なことまでは書かれていませんが、実際に戦場で秀吉を喜ばせる活躍をしたことは確かなようです。史料には、「秀吉所切崩之一番鑓」(槍を振るって敵陣を切り崩す働きをした)と記されています。

さて、戦で戦功を挙げた者に対しては主君から褒美ほうびが与えられます。この戦いで抜群の働きを見せた清正は秀吉からどのような褒美が与えられたのでしょうか。「柴田退治記」には、清正を含む活躍した9人に対して秀吉が、特別に席を設けて盃を下し、黄金らばくの羅帟ろえん(絹織物)と領地を与えたと記されています。さらに、戦功を称えるための感状も秀吉から9人それぞれに対して出されています。この時に与えられた感状は、現在、福島正則宛あてをはじめ原物が5通、片桐且元宛などの写しが3通、いずれもほぼ同じ文面で計8通が現存しています。清正宛のものだけ原物も写しも確認されていませんが、状況から考えて清正にも出されたことは間違いのないでしょう。この時に与えられた秀吉の感状と言われるものが「清正記」に収録されていますが、他の8通の感状と比べると文面がまったく異なるため、後

世創作された偽文書ぎもんじょうだと思われます。

清正以外の8人に与えられた感状には、褒美として領地を与える内容が書かれていますが、もちろん清正にも領地が与えられています。それは、合戦直後の天正11年8月1日に秀吉が出した知行宛行状ちぎょうあて がいじょう※によって確認できます。それには近江国(現在の滋賀県)、山城国(現在の京都府)、河内国(現在の大阪府)のうちから3000石の領地を与えると書かれています。具体的な領地の場所は、別紙に添えられた知行目録によって判明します。現在の地名で言えば滋賀県栗東市出庭(1800石)、京都府京田辺市三山木(50石)、大阪府大東市中垣内(302石)、大阪府四條畷市岡山・砂なびてし(795石)の4か所です。賤ヶ岳の戦い前の清正の知行高は、わずか120石でしたので、実に25倍の加増を受けたこととなります。

この時の褒美をめぐって、有名な逸話が残されています。実際福島正則は清正より2000石多い5000石の領地を与えられましたが、それを聞いた清正は、福島より少ないことに腹を立て、秀吉に直訴した結果、5000石に増やしてもらったと小説などでしばしば書かれています。しかし、史料上では5000石の領地を与えられた形跡はなく、この話は後世に創作されたものだと思われます。

しかし、いずれにせよ清正は、賤ヶ岳の戦いでの功績により秀吉から破格の処遇を得たことは事実であり、自身の生涯でも忘れられない飛躍の年になりました。この時、清正22歳。肥後に入国する5年前の出来事でした。

※「知行宛行状」…領地を与える時に主君が家臣に対して出す文書

このコーナーは、大浪 和弥おきなみ かずやさん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。

加藤清正の実像

しず げ だけ ち ぎょう だか
 賤ヶ岳の合戦後、知行高が3000石に増大し、武将としての出世街道を歩き始めた清正。しかし、意外なことにその後3年間、彼の行動は謎のベールに包まれます。少ない史料をもとにその足取りを追ってみましょう。

〈7〉空白の3年間

天正11年(1583)の賤ヶ岳の合戦後から豊臣秀吉が九州攻めに着手する天正14年までの3年間は、清正の人生の中で最も謎に満ちた空白期間と言ってもよいでしょう。秀吉の家臣として天下統一事業を支える活動をおこなっていたことは間違いないと思われますが、具体的にどこで何をしていたのか、実のところよく分かっていません。残された史料の少なさもありますが、言い換えれば、秀吉に重んじられて出世していった石田三成や福島正則らとは対照的に、いまだ秀吉家臣団の中で重要な地位にいなかったことが窺い知れます。

まず、清正の所在から確認しましょう。賤ヶ岳の合戦後、秀吉は大坂城を築城して拠点を大坂に移します。また、前回述べたように天正11年8月、清正は大坂周辺に3000石の領地を与えられていること、天正13年には父・清忠の菩提を弔うため大坂に本妙寺(後に熊本城内に移す)を建立していることを考えると、遅くとも天正12年には清正も秀吉に従って大坂に移り住んだと考えられます。以後、肥後入国までの約5年間は、大坂に拠点を置き、近畿を中心に活動していたと思われます。

では、具体的にどのような活動をおこなっていたのでしょうか。まずは秀吉の天下統一戦争との関わりの中で見ていきましょう。あ せ の ひ かつ
 織田信雄・徳川家康連合軍と争った天正12年の小牧・長久手の戦いには秀吉軍の一員として従軍していた形跡がありますが、詳しい行動については不明と言わざるを得ません。また、秀吉に反抗する紀伊(現在の和歌山県)の国人衆や有力寺社勢力を降した天正13年の紀州攻め、四国の長宗我部氏を降した同年の四国攻めについては、清正の代表的な伝記である「清正記」やそのほかの伝記類にも記述がないこと

から、実戦部隊ではなく後方支援活動に従事していた可能性が高いと考えられます。紀州攻めに関して言えば、秀吉が紀伊に向けて大坂城を進発する天正13年3月21日の2日前に清正は新たに領地を与えられていますので、前哨戦で何らかの働きがあったのでしょうか。ちなみに、後に清正と肥後を分割統治することになる小西行長は、この時期にはすでに秀吉軍の海上輸送の主力として重要な役割を担っていたことが近年の研究で明らかになっています。

このように清正の活動実態については不明な点が多いですが、少しずつ領地が増えていったことは確かな史料上から確認できます。現存する秀吉の知行宛行状によると、天正13年に河内国(現在の大阪府)に434石、同14年には播磨国(現在の兵庫県)に300石、それぞれ加増されています。着実に領地を増やし、出世階段を昇っていった清正ですが、名実ともに武将と呼べる地位に就くのは、「主計頭」という受領名を名乗り始める天正14年頃だと思われます。従来、この「主計頭」を名乗り始めた時期については、賤ヶ岳の合戦後説(天正11年)、秀吉の関白任官同時説(天正13年)がありましたが、一次史料での「主計頭」の初見史料は、天正14年正月6日に出された秀吉の知行宛行状です。それまで秀吉から出される知行宛行状や書状の宛名表記は「虎介殿とのへ」と通称が使われていましたが、天正14年正月以降は宛名表記が「主計頭とのへ」に格上げされます。「主計」には、「会計を司る」という意味がありますので、清正は豊臣家の財政を担当する重要な役職に就いたと言えます。

史料が少なく、行動に不明な点が多いこの時期の清正ですが、「主計頭」を名乗り始める天正14年以降は豊臣家臣団の中である程度の地位を得ていたことが窺えます。

このコーナーは、大 浪 和 弥 さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。

加藤清正の実像

天正13年(1585)、四国の長宗我部氏を下して四国を平定した羽柴秀吉。秀吉の次なる標的は、怒涛の勢いで勢力を拡大していた九州の島津氏。天正14年、ついに秀吉は島津氏を討つべく軍勢を九州へと進めます。

〈8〉清正、九州へ

天正13年(1585)8月に四国を平定すると、秀吉の目はさらに西の九州へと向けられます。その頃、九州では薩摩の島津氏が北に進出し、九州全土をその勢力下に置くほどの勢力を見せていました。島津氏は秀吉が出した停戦命令にも従わず、豊後の大友氏領や九州北部への侵攻を続けます。こうして、秀吉は九州攻めに着手し、まず手始めに天正14年9月頃から毛利氏や長宗我部氏の軍勢を九州へ差し向けます。しかし、戸次川の戦い(現在の大分市戸次)で大敗するなど島津軍の勢いを止めることができず、ついに秀吉みずから九州へ乗り込みます。

天正15年3月1日、秀吉は8万の軍勢を率いて大坂城を出発します。これより遡ること2か月前の正月1日に秀吉が九州攻めの部隊を編成した際の史料が残されています。それには、主だった家臣の名前とともに各部隊の出発日、率いるべき軍勢の人数が書き上げられ、清正は170人の手勢を率いて秀吉の後備(後方部隊)として3月1日に大坂を出発することになっています。秀吉と行動を共にすると言っても、行列の順序から言えば最後尾に近い位置にあり、秀吉の後ろに付き従う家臣の1人に過ぎません。率いる軍勢の人数は家臣の知行高によって算出されますので、この時期の清正の知行高は4,000石に満たないため170人は妥当な数字と言えるでしょう。ちなみに七本槍の1人である福島正則は先発する主力部隊として1,200人の軍勢を率いて九州に向かっており、この時の清正との格差は歴然です。

さて、秀吉と共に大坂を発った清正は、いつ頃九州へ足を踏み入れたのでしょうか。秀吉に同行した右筆※の1人が書き記した「九州御勤座記」という行軍記録により、九州攻めにおける秀吉の行動が判明します。それによれば、3月25日に赤間関(現在の山口県下関市)に到着した秀吉は、28日に九州へ渡り小倉に入っています。清正が終始秀吉に従って行動したと考



▲泰平寺で秀吉に謁見する島津義久
「横矢旗 九州征伐図(部分)」熊本博物館所蔵

えるならば、清正も3月28日頃に九州の地を踏んだと推測されます。もちろん、清正にとって初めての九州です。

破竹の勢いで九州を南下した秀吉は、4月11日、ついに肥後国南関へ入ります。おそらく清正も同時期に肥後へと入ったものと思われます。この後、秀吉は13日に高瀬、16日に隈本(熊本)、18日に隈庄、19日に八代を経て、27日に薩摩国出水へと入ります。5月8日に薩摩国川内(現在の鹿児島県川内市)の泰平寺で島津氏の降伏を受け入れて、九州攻めは幕を閉じます。

では、九州攻めで清正はどのような動きを見せたのでしょうか。主力部隊ではないため、戦闘には参加せず目立った働きを見せていませんが、清正の場合、九州平定後の戦後処理に当たっていたことが史料から分かります。「清正記」には、名和顕孝が放棄した宇土城の守備を秀吉から命じられ、肥後の新領主・佐々成政に引き渡したと書かれています。これを裏付ける確かな史料として8月10日に秀吉が清正に出した書状があります。そこで清正は「年貢を集める10月まで肥後の城にいなさい」と命じられています。明確に「宇土城」とは書かれていませんが、「清正記」の記述と合わせて考えれば、清正が宇土城の守備と年貢収納の責任者であったと考えられます。また、年貢の収納時期にあたる10月に出された、「島津義久に米2,000石を渡しなさい」と秀吉が命じた書状からも清正の役割の一端が読み取れます。

このように清正は、華々しい戦場での活躍ではなく、戦後処理というどちらかと言えば地味な任務を忠実に遂行することで秀吉の信頼を勝ち得ていきます。この肥後での経験が後に清正の運命を大きく左右することになります。

※右筆 … 文書の作成・執筆を専門とする者

このコーナーは、大浪 和弥さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。

加藤清正の実像

九州を平定した豊臣秀吉は、薩摩からの帰途、熊本で九州の国割り※をおこないます。その結果、球磨郡を除く肥後一国は佐々成政に与えられました。しかし、成政がおこなった政治は肥後の国衆の反発を招き、わずか半年で失脚します。

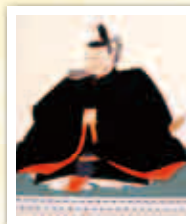
〈9〉肥後入国

天正15年(1587)は、肥後にとって激動の年となりました。豊臣秀吉の九州攻めにより、肥後国内の在地諸勢力(国衆)は、豊臣政権下に組み込まれ、新たな政治段階へと移行します。秀吉は、行政手腕を高く評価する佐々成政を肥後の新領主に任命します。国衆の反発を招かないように「3年間は検地をしないこと」と秀吉から厳命されていたにもかかわらず、入国直後の6月頃から検地を強行します。秀吉の危惧は的中し、検地によって旧来の既得権や経済基盤を否定された国衆が蜂起し、7月には肥後国内で一揆が勃発する事態へ発展します。いわゆる肥後国衆一揆です。

大陸進出を目論む秀吉は、九州を重要拠点として位置付けていましたので、一刻も早く一揆を鎮圧して、九州を前線基地化する必要がありました。そのため、秀吉は諸大名を動員して一揆の鎮圧に取り掛かります。翌年の正月には一揆勢は鎮圧され、秀吉は肥後再編に着手します。

一方、一揆を惹起させた責任によって、成政は領主を解任され、天正16年2月頃に大坂に召喚されます。そこで秀吉から謹慎を命じられ、閏5月14日に切腹します。「清正記」には、切腹する成政のもとに秀吉の使者として清正が派遣され、処分理由を読み上げた後、成政の切腹を見届けたと書かれています。成政が切腹した日、清正はすでに熊本にいますので、残念ながらこの話は成立しません。

さて、ここで清正の動向に目を向けてみましょう。前回見たように、清正は九州攻めの戦後処理のため天正15年10月までは熊本に滞在しています。つまり、清正は一揆が吹き荒れる肥後の状況を目の当たりにしているわけです。その後の足取りについては、史料からは追うことができませんが、一揆鎮圧後の事後処理にあたる上使衆の1人として翌年の正月に再び肥後に派遣されます。「派遣されます」と書きましたが、天正15年10月以後も一揆鎮圧のため肥後に留まっていた可能性は十分にあります。政権を揺るがす一揆が起こっている状況を尻目に、果たして肥後を離れることができた



◀「佐々成政像」
富山市郷土博物館蔵

のでしょうか。

いずれにしても、清正が翌年の2月頃には肥後に滞在していたことは確実です。前述したように秀吉が派遣した上使衆の1人として、検地の実施など肥後再建に向けての事後処理に奔走します。清正は、福島正則・小西行長とともに宇土郡・八代郡・芦北郡・天草郡の検地を担当し、3月以降は隈庄城(現在の熊本市城南町)の城番を務めています。

肥後国内が落ち着きを取り戻した後、次に秀吉がすべきことは、新たな領主の人選と任命です。秀吉は、九州を「五畿内同前」(畿内と同様)と位置付けていましたので、新領主は秀吉が信頼を置く、忠実かつ有能な家臣でなければなりません。そこで、抜擢されたのが当時27歳の清正と31歳の小西行長です。清正は、肥後国の北半分(玉名・山鹿・山本・飽田・託麻・菊池・合志・阿蘇の各郡)と芦北郡の一部が与えられ、宛行われた知行高は約195,000石。それまでの清正の地位や経歴、さらに知行高が約4,300石だったことを考えると、異例の出世です。

ここで、清正の肥後入国時期について触れておきましょう。通説では、領主に任命する旨を記した秀吉の朱印状(辞令)が発令された天正16年閏5月15日以降に肥後に入国したとされています。しかし、前月には妻子とともに肥後に入っていることが秀吉の書状から判明しますので、領主に任命される以前にはすでに肥後にいたこととなります。上使衆として検地や城番を務めた後も肥後に留まり、大坂に戻ることなく、肥後半国の領主に就任した可能性も考えられます。

ようやく名実ともに大名と呼べる地位に上り詰めた若き清正。なぜ、清正は肥後半国の大名に取り立てられたのでしょうか。

今回は、秀吉が清正を抜擢した意図を探っていきたいと思います。

※国割り…新たに大名の配置を決めること

このコーナーは、大隈 和弥さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。

加藤清正の実像

天正16年(1588)閏5月、27歳にして肥後半国の領主となった清正。秀吉が朝鮮出兵に向けて最重要拠点と位置付ける肥後に、なぜ一家臣に過ぎなかった清正が配置されたのでしょうか。今回は清正を抜擢した秀吉の意図を探ります。

〈10〉領主任命の背景

なぜ清正は肥後半国の領主に任命されたのか。

この問題は、長い間真剣に議論されたことはありませんでした。従来、この問いに対しては「清正自身が朝鮮出兵の先鋒を希望したため肥後を望んだ」「秀吉子飼いの武将だから」などと説明されてきましたが、果たしてこれは事実なのでしょうか。武勇を誇る清正が秀吉に一国を所望して、それを秀吉が認めたとする逸話が有名ですが、これは後世に創作されたものでしょう。しかも当時の史料を見ると、戦における清正の実戦経験は少なく、目立った武功と言えば賤ヶ岳の合戦ぐらいです。後世語り継がれているような武勇に優れた武将の姿はそこにはありません。史料から浮かび上がってくる人間像は、軍人ではなく能吏※・清正の姿です。

では、時間を遡って肥後入国以前における清正の経歴を見てみましょう。そこに清正が領主に任命された本当の理由が隠されています。まず、清正の大きな役割として蔵入地(秀吉の直轄領)の管理を任されていることが注目されます。蔵入地は豊臣政権を支える財政基盤であるため、その管理は重要な任務でした。最初に清正が任された地域は、播磨国(現在の兵庫県)にある5,000石程の蔵入地です。これは天正14年のことで、同時に清正は主計頭を名乗り始めていますので、ここから清正は蔵入地代官としてのキャリアをスタートさせたと思われます。次に判明する蔵入地は、讃岐国(現在の香川県)です。この地は本来、尾藤知宣の所領でしたが、天正15年の九州攻めで知宣が失態を演じたため所領を取り上げられ、領主不在となっていました。そこで、秀吉は清正を讃岐国に派遣して領内蔵入地の現況調査を命じています。これが天正15年8月頃のことです。この時、清正は九州攻めの戦後処理のため九州にいますので、実際には清正ではなく家臣が実務にあたったようです。また、このほかに和泉国(現在の大阪府南部)の堺周辺の蔵入地代官も務めていた形跡があります

が、詳しいことは不明です。このように数か所の蔵入地を担当した経験が、清正にとっては領主へステップアップするための実績となり、その後の道を開きました。言い換えれば、蔵入地の管理という秀吉が与えた重要任務を問題なく遂行したことで、秀吉の信頼を得、肥後半国の領主に登用されたとと言えます。実際に、秀吉は書状の中で「お前は何事にもよく頑張り、役に立つので」と肥後を与えた理由を述べ、それまでの清正の働きぶりを高く評価しています。

さて、秀吉が理想とする人材に成長した清正ですが、なぜ肥後だったのでしょうか。当時の史料を読む限りでは、清正の肥後配置は決して既定路線ではなく、秀吉の現実に即した人事査定を経て決定されたことが分かります。清正の場合、天正15年4月に九州攻めで肥後に来て以来、国衆一揆の鎮圧やその後の戦後処理、また翌16年正月から4月頃まで実施された上使衆検地やその後の城番任務に至るまでの行動を見ると、領主に就任する1年以上も前から清正は肥後を拠点に活動していることが分かります。つまり、清正は秀吉家臣の中でもっとも肥後の実情に通じた人物になっていたのです。結果的に、これらの経験が清正が肥後に送り込まれる決定的な要因となりました。

秀吉の政治方針や与えられた指示を理解し、それを忠実に実践できる経験や能力を兼ね備え、かつ肥後という国に1年以上も深く関わり、内情を知り尽くしている人物は清正以外にいなかったわけです。秀吉ならではの適材適所の家臣起用が見て取れます。

清正は戦に強い武将としてではなく、優れた行政マンとして肥後に送り込まれたというのが妥当な見方ではないでしょうか。

※能吏…有能な役人

このコーナーは、大^{おお}浪^{なみ}和^{かず}弥^やさん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。



加藤清正の実像

天正17年(1589)、清正とともに肥後を分割統治していた小西行長の領地で、一揆が起こります。天草一揆です。この一揆鎮圧をめぐる対立したと言われる清正と行長。果たして、その真相はいかに。

〈11〉天草攻め

清正が領主に就任した翌年の天正17年、天草で一揆が起こります。天草は、肥後の南半分を治める小西行長の領地でしたが、以前から有力な在地勢力が存在していました。天草氏、大矢野氏、上津浦氏、志岐氏、栖本氏のいわゆる「天草五人衆」です。行長の領主就任に伴い、彼らは行長の配下となるように秀吉から命じられていましたが、それに従わず、行長との溝は次第に深くなっていきました。一般的には、行長が居城・宇土城を築く際に負担を課したところ、それに応じなかったことが、天草攻めの原因と言われていいます。しかし、彼らの態度は、行長個人というより、豊臣政権に向けられた不信任と捉えるべきでしょう。そのため、行長は豊臣政権の威信をかけて一揆を鎮圧しなければならず、10月に自ら軍勢を率いて天草へ渡海します。近隣大名の援軍を得た行長軍は、11月8日に一揆の中心人物・志岐麟泉を降伏させて志岐城を落とし、25日には天草種元が籠城する本渡城を制圧して、苦戦しながらも一揆の鎮圧に成功します。豊臣政権の面目は何とか保たれました。

では、この天草攻めに清正はどう関わったのでしょうか。清正も一揆鎮圧軍の一翼として天草へ乗り込みます。行長領・天草で起きた一揆だからと言って、清正の立場上、決して対岸の火事では済まされません。なぜなら清正は、秀吉から再三にわたり「何事も行長と相談して肥後を治めよ」と言われているため、清正の連帯責任も問われかねません。

これまで、天草攻めについては、戦下手な行長が一揆勢に手を焼き、清正に援軍を要請して、戦に長けた清正の力を借りて何とか一揆を鎮圧したと両者が対比的に描かれてきました。しかし、当時の史料を読む限り、真相は少し違うようです。行長が清正に援軍を求めたことは確かですが、それは清正配下の軍勢を天草に差し向けて欲しいというもので、清正自身の出陣は拒否しているのです。この理由について

行長は、秀吉への書状の中で「2人揃って居城を留守にすることは、秀吉様の命令に反するため、清正自身の渡海は思い留まらせたと述べています。

しかし、清正は半ば強引に天草へ渡海します。清正が行長の軍事力を心許なく思っていた節もありますが、実はこの出陣は清正の必死さの表れだったのです。清正の置かれている状況を考えてみましょう。前にも述べたように、天草は行長の領地ですが、秀吉に「何事も2人相談して肥後を治めよ」と釘を刺されていますので、清正にとって天草一揆は決して他人事ではないのです。しかも清正自身、大軍を率いての戦は意外にも今回は初めてですので、「戦下手の行長の加勢に行ってやる」などと、そんな余裕など清正にはなかったと思われます。前領主・佐々成政切腹の原因となった2年前の国衆一揆もまだ記憶に新しいはずですが、実は、行長だけではなく清正も絶対に失敗が許されない切羽詰った状況に置かれていたのです。

このように、天草攻めに対するこれまでの見方は少し修正する必要がありそうです。後世書かれた伝記や小説などで2人の不仲がよく強調されますが、はじめから仲が悪かったわけではなく、秀吉に「相談して肥後を治めよ」と厳命されている以上、2人は協力して事態に対処しなければなりません。2人は一揆を鎮圧するという1つの目的を達成するため、それぞれの立場や考えで動いたわけですが、この時のお互いの行動が、その後の両者の関係に微妙な溝を生じさせたのでしょう。新米領主の2人は、この段階ではまだ運命共同体だったと言えるかもしれません。

加藤清正の実像

天正17年(1589)の天草攻めを無事に終えた清正は、いよいよ本格的な国づくりに着手します。今回は、清正が領国経営の基礎を作り上げる天正18年、19年頃の動向を史料から見ていきたいとします。

〈12〉多忙な清正

清正の年表などを見ると、天正17年の天草攻めの次は、同20年の朝鮮出兵へと項目が飛び、その間の清正の動向はこれまであまり注目されてきませんでした。しかし、この時期に出された清正の書状を読むと、領主として多忙な日々を送っていることが分かります。

まず、この時期に特徴的なこととして、家臣団の編成が急ピッチで進められています。領主に就任する前年、天正15年の九州攻めの際に、清正が抱えていた家臣は200人に満たない程度でしたが、190,000石の領主ともなると2,000人から3,000人の家臣が必要になりますので、清正にとって家臣の人員、すなわち軍事力の確保は優先されるべき課題でした。領主就任後に発給された知行宛行状ちきょうあてがいきじょうを見ると、天正17年8月に大量採用をおこない、翌年以降も度々知行宛行状が出されていますので、朝鮮出兵を前にして相当数の家臣を召し抱えたようです。また、秀吉の指示通り、清正は前領主・佐々成政いしんの遺臣いしんも召し抱えており、その中には佐々平左衛門や大木兼能のような後に清正の重臣となる人物もいました。

このように、多くの家臣を召し抱える一方で、彼らが居住する城下町の建設や政治と軍事の拠点となる城郭ふしんの普請(工事)もこの時期における大きな事業の一つです。

まずは、この頃の清正の居所について確認しましょう。天正18年頃から清正の書状が増え始めますが、これらを読むと天正18年の前半は上方かみかた(京都・大坂)、後半は熊本、天正19年の前半は上方、一旦熊本に戻った後、10月から肥前・名護屋なごや(現佐賀県唐津市鎮西町)に滞在しているようです。あまり熊本にいないことが分かります。そのため、清正が出した書状は、熊本で留守を預かる家臣に対する指示が多くなります。清正が最も信頼を寄せる重臣しむかわまたの下川又左衛門さへもんと加藤喜左衛門かどうきざへもんに宛てた書状が目立ち、いかにも清正らしい細かな指示が書かれています。

まず、天正18年2月26日の書状で、「堀や石垣の普請については、油断なく念入りに進めよ」と指示を与えています。これは清

正が城郭の普請について述べている初見史料として注目されます。また、同年4月24日に京都から出した書状では、「石くら」や「本丸」についての普請を指示し、「てんしゆへ之はし出来候や」(天守へ渡る橋は出来たのか)という一文も見えます。この橋について従来は、坪井川に架かる橋を指していると考えられていましたが、富田紘一氏の研究により流路が変更される以前の白川に架けられた橋であったことが明らかにされています。以前の白川は、現在の代継橋付近で流路が北上し、市役所付近まで流れた後そこから西へ折れ、現在の坪井川に沿って中央郵便局を経て、長六橋付近で現行の白川に合流する流路だったようです。ただし、書状中に見える「てんしゆ」の所在地や清正が言及している城については、古城の隈本城(現第一高校付近)とする説と、現在の熊本城とする説があり、議論が分かれるところですが、いずれにしても清正が「油断なく進めよ」と繰り返し強調していることから、清正が並々ならぬ熱意で、比較的早い段階から城郭整備に着手していたことは確かです。

また、天正19年5月には細工町の町割を清正自身でおこなっています。町割図を見ると、旧来の職人層に代わって、大坂など上方から移住してきたと思われる商人層のきが軒を連ねています。家臣の数が増加するに伴い、彼らが居住する城下町の整備も急がれ、朝鮮出兵に備えた軍事物資の供給地としての役割も担うことになります。この頃、現在の熊本市街地は一大都市へんぽうに変貌しつつあったと言え、現在の区割や道路の原形はこの頃形成されたと考えられます。

このように、天正18年から同19年にかけて清正は、城郭の普請とそれを中心とした城下町の建設に力を注ぎます。また、天正19年10月からは朝鮮出兵の前線基地となる名護屋城の普請も担当していました。家臣集めや城下町の整備、熊本や名護屋での城づくり、朝鮮出兵の準備など、この時期の清正は生涯で最も多忙で充実した日々を送っていたのではないのでしょうか。

このコーナーは、大浪おおなみ和弥かずやさん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。





天正19年(1591)に東北を平定して国内統一を果たした豊臣秀吉は、かねてより表明していた「唐入り」を本格化させます。そして、翌年に日本、朝鮮、明国の3国を巻き込んだ6年におよぶ朝鮮出兵が始まります。

〈13〉朝鮮出兵 - 釜山浦^{プ サン ホ}上陸から漢城^{ハン ソン}入城まで -

天正19年8月、清正は京都で秀吉に謁見し、来年3月に唐※へ攻め入ることを正式に伝えられ、それとともに国内の前線基地となる名護屋城の築城など唐入りに備えるよう命じられます。直後の8月13日に清正は、熊本でも唐入りの準備を整えるため国元の家臣へ書状を送っています。それには家臣や奉公人の増員、軍事物資の調達・確保、舟の手配など36項目におよぶ細かな指示が書かれています。この書状の冒頭で清正は「唐を征服後は20か所の地域を秀吉様より与えられることになっている」と家臣に対して大風呂敷を広げています。これは清正の領土欲というよりは、家臣を鼓舞するための清正なりのリップサービスだったと思われるのですが、唐入りに対する清正の意気込みが伝わります。一旦熊本に戻った後、10月からは肥前・名護屋に滞在し、そこで黒田長政や小西行長とともに名護屋城の普請をおこなっています。

さて、ここで朝鮮出兵へ至る過程を確認しておきましょう。秀吉の目的はあくまで唐(明国)の征服でしたので、朝鮮に対しては日本への服属と「仮途入明」(明国へ侵攻する日本軍に朝鮮の道を貸すこと)を求めました。この交渉にあたったのが小西行長と対馬の領主・宗氏です。結果的にこの交渉が決裂したため、まずは朝鮮を武力で降伏させなければならなかったのです。

京都に留まっていた秀吉は、天正20年3月13日に「陣立^{じんだて}」（軍勢の編成）を発表します。それによれば清正は、鍋島直茂、相良頼房とともに第2軍に編成され、清正が率いる軍勢は10,000人となっています。鍋島が12,000人、相良が800人ですので、第2軍は総勢22,800人です。第2軍は、行長率いる第1軍に続いて朝鮮へ渡る手筈^{てはず}になっていました。

3月末をもって対朝鮮交渉が打ち切れ、ついに4月12日、行長ら第1軍が朝鮮へ渡海します。海上の天候不良のため第1軍に遅れること5日、清正率いる第2軍が17日に待機地の対馬を発し、翌18日に釜山浦に上陸します。上陸後、漢城(当時の都、現在のソウル)に入るまでの間、史料で確認できる限り、清正は日本に対して4度戦況を報告しています。その報告から清正の行動を追ってみましょう。

まず清正は、上陸後10日
ヤンサン オニヤン
 ほどで梁山と彦陽の城を立て
 続けて攻め落とします。
キョングジュ
 そして4月20日に慶州の城、
ヨンジョン
 22日に永川の城を攻め、こ
おしれ
 れらも難なく占領します。慶

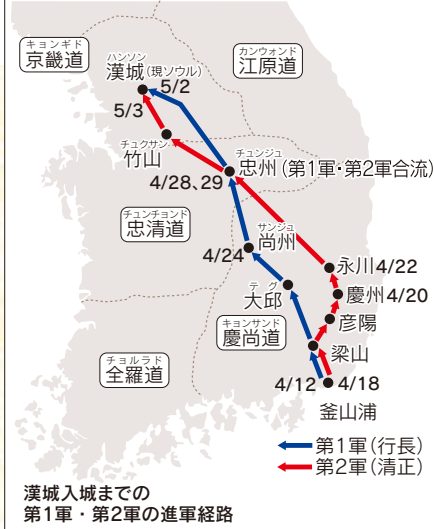
州では3~4,000人の朝鮮兵を討ち取ったと報告しています。清正は「数日のうちに都へ入る報告ができるでしょう」「城攻めは全く労力が要らず、ご安心ください」と余裕ぶりを見せ、まさに破竹の勢いで進軍したことが分かります。

4月28日に漢城から約100km離れた忠州に入り、行長ら第1軍と合流します。そこで両軍は漢城へ向かう進軍ルートについて協議し、第1軍は北進して漢城へ至るルートを、清正ら第2軍は西へ進むルートを採り、翌29日に忠州を発します。「清正記」には、この時の進軍ルートを巡って清正と行長が対立する場面が書かれています。先に漢城に入りたい清正が、漢城へ入るためには大きな河を渡らなければならない西ルートを行長に強要したため、行長が激怒し、先陣争いを巡って激しく口論を交わす有名な場面です。しかし、清正と行長が先陣を競って対立したことをうかがわせる確かな史料はなく、また、両者が漢城への一番乗りには固執している様子もないため、後世に創作された可能性も考えられます。

さて、第1軍は5月2日に東大門から漢城へ、翌日に第2軍が南大門から漢城に入りますが、忠州陥落の報を受けていた朝鮮国王らはすでに漢城を脱出した後でした。このことを大いに悔やんだ清正は、すぐに脱出したと思われる方角に配下の者を派遣して、一行を搜索させています。一方、秀吉は5月16日に名護屋で漢城陥落の報告を受け、思いのほか早く漢城入りしたことを満足に思う旨を記した書状を清正に送っています。第1軍の釜山浦上陸から漢城入りまでわずか3週間。秀吉もこれほど順調に、しかも早く都を落とせるとは思っていなかったようです。

※唐…日本における中国の呼称

このコーナーは、^{おお なみ かず や}大 浪 和 弥 さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。



加藤清正の実像

天正20年(文禄元年=1592)5月3日に漢城(朝鮮の都、現在のソウル)に入った清正率いる第2軍。その後、続々と日本軍が漢城に到着し、今後の方針について話し合いが持たれた結果、明国への即時侵攻は見送られることになりました。

〈14〉朝鮮出兵 - 八道国割から漢城撤退まで -

漢城に入った日本軍の諸将は、秀吉が掲げる明国への侵攻をひとまず中断して、まずは侵攻の足掛かりとなる朝鮮の安定的統治を優先させます。朝鮮を8つの地域に分けて、それぞれ武将を配置して統治させる、いわゆる「八道国割」と呼ばれるものです。話し合いの結果、清正率いる第2軍は朝鮮半島の北東部の咸鏡道^{ハムギョンド}を、行長率いる第1軍は北西部の平安道を担当することになりました。5月16日に漢城を北に向けて出発した第1軍と第2軍は27日に臨津江を渡り、29日に開城^{イムジンガン}を占領します。ここまでは清正と行長は共同作戦をとっているようです。しかし、開城入りした清正としては一刻も早く担当地域の咸鏡道^{ハムギョンド}へ向かいたかったようで、書状の中で「開城では軍勢が話し合いと称して長いこと留まっており、私としては非常に迷惑している。先を急がないと秀吉様に何と思われるか」と述べ、はやる気持ちを抑えきれない様子がうかがえます。おそらく、清正は朝鮮の王子らが咸鏡道方面へ向かったという情報を早い段階で掴んでいたのでしょう。

清正一行は、宝山から東に進路をとり、6月17日に安辺^{アンビョン}に入ります。その後、北へ進路を変え、24日に咸興^{ハムフン}、7月17日には城津^{ソンジン}付近まで進軍しています。そして、ついに7月23日に会寧^{フェリョン}付近で朝鮮の2人の王子、臨海君と順和君の身柄を確保します。実際には清正軍が捕らえたわけではなく、地元の反朝鮮王朝勢力が王子一行を捕らえ、清正に密告して身柄を引き渡したようです。このことがよほど嬉しかったのか、清正は王子捕縛^{ハ・バク}の知らせを秀吉はもちろん、ほかの武将らにも喧伝^{けんでん}しています。

そして、7月末に会寧を出発した清正は、その後1か月間、豆満江^{ドウマン}を越えてオランカイ^{オランカイ}※と呼ばれる地域へ遠征し、明国へ侵攻するためのルート視察をおこなっています。8月22日に再び鏡城へ戻り、南へ下って北青、咸興を経て、安辺に入ります。翌年2月まで清正はここを本拠地として咸鏡道の統治に専念して、秀吉の命令でもある安定的な年貢の徴収や規律の厳守を家臣たちに徹底させます。このあたりから清正に心情の変化が見られ、当初は明国への即時侵攻を目指していましたが、オランカイ遠

征で朝鮮半島の広大さを身をもって感じ、日本への報告の中で「朝鮮は思いのほか広い」「私は安辺に留まり、しばらくは咸鏡道の統治に専念しようと思います」と考え方が変わっています。また、他地域の戦況も耳にしていたようで、小西行長が担当する平安道の苦戦、劣勢ぶりを皮肉りつつ、「このままだと明国への討ち入りは難しい」と現実的に明国への侵攻は難しいと考え始めます。

しかも、この頃になると明国による朝鮮救援軍の派遣が始まり、日本軍は敗戦が続き、各拠点からの撤退を余儀なくされます。咸鏡道の清正軍も例外ではなく、はじめは協力的だった地元勢力が次第に朝鮮軍へなびいていったことで反撃に遭い、また、現地での寒さや飢えも重なり、非常に苦しい状況に陥ります。

こうした状況の中、年が明けて文禄2年1月7日に小西行長が平安道の平壤から撤退を始め、16日に漢城まで後退します。このほかの諸将にも撤退命令が出て、1月末までに続々と漢城へ再集結し、今後の対策について協議します。清正は、最後まで咸鏡道に固執しますが、ついに撤退命令に従わざるを得なくなり、2月21日に安辺を出発して、29日に漢城へ入ります。しかし、清正が到着する前には、漢城からの一時撤退などがすでに決められており、日本軍は4月18日に撤退を開始します。1年前、釜山浦に上陸した際、約10,000人いたと思われる清正の軍勢は、漢城撤退直前の3月末には5,492人と半減しており、日本軍がいかに過酷な戦いを強いられていたかが分かります。

※オランカイ…朝鮮半島北方にある女真族が住む地域。



このコーナーは、大 浪 和 弥 さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。

加藤清正の実像

文禄2年(1593)3月、日本軍の諸将は漢城(現在のソウル)に集まり、今後の方針について協議します。そして秀吉の指示のもと、前線を朝鮮中央部の尚州^{サンジュ}まで撤退させ、尚州以南の主要拠点に諸将を再配置、朝鮮南部の領土確保と軍勢の立て直しを図ります。

〈15〉「地震加藤」の真相

新たな布陣により清正軍7,000人は、尚州への在陣とそこでの城郭^{ふしん}普請を命じられていましたが、ほどなく朝鮮半島南岸に近い晋州城攻略のため、6月から晋州に転戦しています。しかし一方では、戦局の転換に伴い、小西行長らを中心として明国との終戦工作が水面下で進められることになります。

晋州城陥落後、秀吉は朝鮮半島南半分の実効支配を目指し、各拠点でいわゆる「倭城^{わしゅう}」と呼ばれる日本型城塞の構築と領内統治を命じ、しばらく膠着^{こうちやく}状態が続きます。清正は釜山^{プサン}浦から30kmほど北の西生浦と呼ばれる地域に在番を命じられ、そこに西生浦城を築きます。以後、清正はここを拠点として活動をおこない、臨戦態勢を維持しつつも、独自の講和交渉^{こうわこうしょう}を模索していました。

さて、先述しました小西行長による明国との講和交渉が文禄5年に大詰めを迎えようとしていました。粘り強い交渉の結果、明国の勅使^{ちくし}一行が講和のため日本に渡海して秀吉に面会^{めんかい}する手筈^{はず}が整い、講和は目前に迫っていました。この時、清正に人生最大の試練が訪れたと言われています。いわゆる「地震加藤」と呼ばれる、主君に忠義を尽くす家臣のお手本として、戦前の教科書にも登場する清正を語る際には必ず引用される逸話です。

一般的な「地震加藤」の話は次のようなものです。講和交渉を進める行長や石田三成が、それを妨害する清正を秀吉に訴え、秀吉の怒りを買った清正は、日本に呼び戻されて謹慎と切腹を命じられます。そこに京都・伏見で大地震が起き、主君・秀吉の身を案じた清正は、誰よりも早く伏見城の秀吉のもとに駆け付け、秀吉を大いに喜ばせて、晴れて許されたというものです。この話は、清正死後まもなく編纂^{へんさん}された清正の伝記「清正記」にも登場するため、あたかも事実のように語られていますが、真相は少し違うようです。

まず、清正が日本に呼び戻された理由については、従来朝鮮における清正の横暴な振る舞いを行長が秀吉に訴えたことが原因だとされていますが、実は秀吉と行長が進めていた明国との講和交渉に関係しているようです。講和交渉の譲歩策として、日本側は文禄4年から拠点以外の倭城を破却するなど、秀吉の指示のもと

と段階的な軍縮に取り組んでいる状況でした。清正の帰国は、軍縮を象徴する出来事として講和締結に向けた秀吉の政治的パフォーマンスであったと同時に、明国の勅使^{ちくし}一行を伏見で迎え入れるための要員としてわざわざ上方へ召還されたものと思われます。実際に清正は、文禄5年5月に朝鮮から対馬へ渡り、まもなく上方へ入っています。そのような中、閏7月13日午前2時頃、京都・伏見を中心とするマグニチュード7.0(推定)の慶長伏見大地震と呼ばれる地震が発生し、完成間もない伏見城が倒壊するなど、上方を中心に大きな被害をもたらしました。清正がこの歴史的な大地震に遭遇していたことは事実で、地震発生2日後の閏7月15日に清正は、熊本にいる家臣に書状を出しています。その中で清正は「上方で大地震が起きて、伏見城の中はことごとく揺れた。しかし、秀吉様をはじめ、こちらにいる方々は皆無事である。また我々も無事である。京都や大坂の屋敷は頑丈で倒壊しなかった。伏見には我々の屋敷がないため幸運だった。」と伝えています。この内容から清正は、秀吉の安否を気遣ってはいませんが、「伏見には屋敷を持っていない」と言っていますので、地震が発生した13日深夜には伏見にいなかったと考えるのが自然で、地震発生後真っ先に伏見城の秀吉のもとへ駆けつけたとは考えにくいです。仮に秀吉に面会したとしても、早くても翌朝のことだったと思われます。

当時の史料や状況を考えると、この「地震加藤」の出来過ぎたエピソードは、後世に脚色された清正伝説の一つと言えるでしょう。結果的に明国との講和は決裂して朝鮮への再出兵が開始され、清正は一旦熊本に戻った後、慶長2年(1597)正月に再び朝鮮へ渡ります。



▲「錦絵 伏見大地震之図」熊本博物館所蔵
画面中央が加藤清正

生誕450年記念展「加藤清正」

期間／7月20日(金)～9月2日(日) 場所／県立美術館(本館)
詳しくは県立美術館(☎096-352-2111)へ

このコーナーは、大^{おお}浪^{なみ}和^{かず}弥^やさん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。

加藤清正の実像

文禄5年(1596)9月、大坂における明国勅使との講和交渉が決裂し、秀吉は諸大名に朝鮮再出兵の準備を命じます。これにより、いわゆる慶長の役と呼ばれる戦いが開始され、清正は再び朝鮮半島へ渡ります。

〈16〉蔚山城の籠城戦

文禄5年(10月に慶長に改元)11月上旬に熊本を出発した清正は、名護屋を経て翌慶長2年正月13日に釜山浦の西に位置する多大浦に上陸します。その後すぐに自身の居城である西生浦城に移り、朝鮮への再侵攻に備えて城郭の強化・修築に取り掛かります。同年2月21日に秀吉は再派兵の陣立てを整え、清正は10,000人の軍勢を率いて西生浦城の在番を命じられました。また、この陣立てで清正は先手に配置され、進撃に際しては先陣を務めることになっていました。ここでも清正軍は、文禄の役の時と同様に日本軍の主力部隊として位置付けられました。

同年7月、毛利秀元を大将とする右軍は清正を先鋒として進撃を開始。秀吉が命じた赤国(全羅道)の領土確保を目指し、西に向かいます。途中8月14日から16日かけて、慶尚道・全羅道の道境に位置する黄石山城を落とし、同月下旬に全州に至り、小西行長率いる左軍と合流します。そこで両軍話し合いが持たれ、清正軍は忠清道への侵攻のため北上して清州方面へ進むことになります。忠清道をひと通り転戦し、ある程度制圧したという名分を立てた清正軍は、慶尚道南岸地域に拠点を移して、そこを固めよという秀吉の命令に従うかたちで南下し、10月8日に蔚山に入ります。その直後から清正は浅野幸長や毛利家家臣の穴戸元統らと共同で蔚山城の築城に着手します。普請の大部分は浅野・毛利勢が担い、急ピッチで進められた結果、2か月程でほぼ完成したようです。史料によると当時の蔚山城は、周囲2.7kmの惣構に濠と土手を巡らし、最大13mの高さを持つ石垣の総延長は1.4km、堀の総延長は1.8km、本丸、二の丸、三の丸に大小12の櫓を備える本格的な城郭規模でした。しかし、この突貫工事で進められた蔚山城普請には、日本と朝鮮の民衆が大勢酷使され、厳しい寒さと過酷な労働のため逃亡する者が続出しました。

さて、蔚山城完成が目前に迫った12月22日、明・朝鮮の連合軍数十万人が蔚山城を取り囲み、23日には惣構に迫る勢いで攻め寄せます。この時、蔚山から南へ約15km離れた西生浦城にいた清正は大軍襲来の報告を受け、ただちに蔚山へ向かい22日の

夜には蔚山城へ入ります。敵軍が迫る最中の23日に、城普請を担当した浅野幸長から正式に蔚山城を受け取り、清正が守備の指揮を執ります。年が明けて慶長3年正月3日深夜から翌日朝方

にかけて総攻撃を受けますが、なんとかこれをしのぎ、4日には毛利秀元らの救援部隊が到着して昼前によく敵軍は撤退します。一時は降伏や死をも覚悟するほど極限状況に追い込まれた清正は、この救援によって人生最大のピンチを乗り切り、まさに九死に一生を得たと言えます。

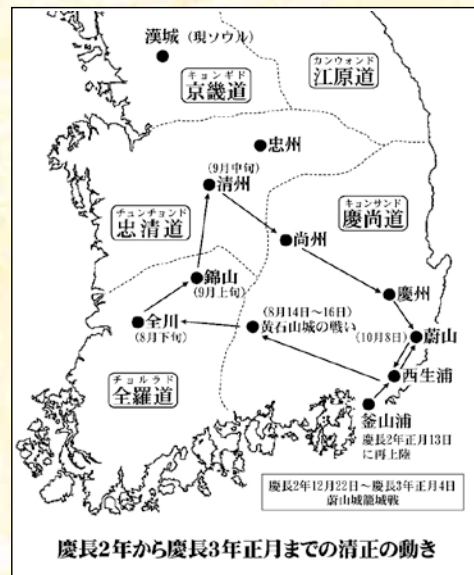
この戦いで30万人の明・朝鮮軍が襲来して、このうち数万人を討ち取ったと清正は秀吉に報告しています。この数字が多少誇張されたものであるにしても、普請途中の蔚山城には十分な水や兵糧が備えられておらず、戦死者以外にもおびたしい数の餓死者・凍死者を出すなど、朝鮮出兵で繰り広げられた戦いの中で最も凄惨を極めた籠城戦でした。清正が日本への報告の中で「あわれな現場の状況を一度見ていただきたい」と力なく述べていることから、この籠城戦がいかに熾烈で悲惨なものだったのかがうかがえます。

この時清正は数え年で37歳。7年間にわたる朝鮮出兵も慶長3年8月18日の秀吉の死を契機としてようやく終息に向かいます。

※蔚山広域市

世界的自動車メーカー・現代自動車の主力工場や国内最大の石油コンビナート・SKエナジーなど巨大企業を擁する人口110万人の韓国随一の工業都市・蔚山広域市。清正が籠城した蔚山城や本市に蔚山町という旧町名が残るなど、歴史的関わりが深い両市は、平成22年(2010)4月26日に友好協力都市協定を締結し、様々な分野で交流と協力を進めています。

このコーナーは、大浪和弥さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。



加藤清正の実像

慶長3年(1598)6月頃から病状が悪化していた豊臣秀吉は、8月に入ると自らの死期が近いことを悟り、徳川家康や前田利家らを呼び寄せて、息子・秀頼の行く末を託します。そして8月18日、伏見城で波瀾に満ちた62年の生涯に幕を閉じます。

〈17〉秀吉の死と朝鮮からの撤退

慶長3年1月の過酷な蔚山城籠城戦を生き延びた清正は、そのまま蔚山城への在番を命じられ、帰国するまでここに駐留することになります。清正は、籠城戦で壊滅的被害を受けた蔚山城の修復をおこない、明国・朝鮮連合軍の再襲来に備える一方で、独自のルートで明国側と講和交渉を模索します。

そのような中、秀吉の死去を受けて、朝鮮の日本軍に撤退命令と秀吉死去の報を伝えるため、10月1日に徳永寿昌と宮木豊盛が、日本から朝鮮へと渡ります。秀吉の死去から両者が朝鮮へ渡るまで1か月以上も間が空いていますが、秀吉死去の知らせは、朝鮮に在陣する日本軍の動揺を引き起こし、戦況に大きく影響する恐れがあるため、その死はしばらく秘匿されました。また、敵方への情報漏えいを防ぐため、この両者は秀吉の名で出された朱印状を携えて朝鮮に渡っています。その朱印状には「秀吉自身は回復に向かっている」とさへ記されており、あくまでも対外的には、秀吉健在を装い続けたのです。しかしながら、死去直後から日本軍内部だけではなく、明国・朝鮮軍の間にも秀吉の死去、あるいは重体の噂は取り沙汰されており、この隙を突いて両軍は各地で攻勢に転じます。清正が守備する蔚山城も、9月20日から断続的に攻撃を受けています。

この両者の口から正式に朝鮮の日本軍に秀吉死去の知らせがもたらされます。10月中旬には全軍に対して、朝鮮王子の来日、もしくは日本への朝貢(貢ぎもの)を条件とする講和交渉をまとめたうえで、全軍撤退すべしとの方針が伝えられます。この撤退に向けた交渉において、日本の政権上層部からその交渉役に指名されたのが清正でした。それまで独自に進めていた和平交渉の下地もあり、且つ敵軍に対する知名度もあることから交渉がスムーズに運ぶと判断された結果だと思われますが、その後清正が撤退に向けて敵軍と交渉をおこなった形跡はありません。

先述したように清正は、慶長3年2月から蔚山城に在番していましたが、清正が秀吉の訃報に接するのは、徳永・宮木の両者が

釜山浦入りした10月1日から間もない時期だったと思われる。釜山浦と清正のいる蔚山は、わずか40kmほどしか離れておらず、その情報はすぐに清正のもとに伝えられたものと考えられます。当時の史料からは、主君・秀吉の死に対する清正の心情をうかがうことはできませんが、出世の大恩人であり絶対的君主であった秀吉という大きな存在を失った悲しみと、7年におよぶ朝鮮出兵がようやく終わりを告げるという一種の安堵感など、さまざまな感情が入り混じった複雑な心境だったのではないのでしょうか。

しかし、清正は感傷に浸る間もなく、朝鮮からの早期撤退という現実的な問題に対処しなければなりません。徳川家康は、10月19日付けの書状で「黒田長政と相談のうえ、釜山浦へ移り、帰国しなさい」と日本から清正へ撤退命令を伝えます。この書状が、秀吉亡き後の政権運営を託された家康を含めた五大老と呼ばれる数名の実力者の連名ではなく、家康が単独で発給しているところに、豊臣政権内部で親家康派を形成するための政治的意図がうかがえます。すでにこの時から、政権内部の主導権争いをめぐる駆け引きが、水面下で始まっていたと言えるでしょう。この家康書状が11月中旬に清正のもとに到着すると、清正は撤退を決意します。そして、11月16日に清正は泗川にいる島津義弘らに対して「撤退命令が出ているので、明日17日に蔚山を脱出するつもりである」と述べ、さらには泗川にいる島津軍救援、順天で苦戦している小西行長軍の救援に向かう用意があることも伝えます。しかし、結果的に清正は自軍の撤退を優先させて、蔚山城を放棄して釜山浦に向かいます。

釜山浦に着いた清正は、日本陣営を焼き払い、11月23日に朝鮮を離れます。27日に釜岐に寄港した後、12月2日に博多へ帰陣して、ようやく帰国を果たします。しかし、日本の土を踏んだ清正を待ち受けていたのは、秀吉亡き後の豊臣政権内部の権力争いと長年の朝鮮出兵で疲弊しきった肥後領内の再建でした。

このコーナーは、大隈和弥さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。



加藤清正の実像

慶長3年(1598)11月、朝鮮から帰国した清正は、肥後へは戻らずにそのまま上方へと向かいます。そこでは、朝鮮から帰国した諸将の間に渦巻く確執と怨嗟が、秀吉亡き後の権力争いと相俟って、一触即発の様相を呈していました。

〈18〉関ヶ原への道

慶長3年10月16日、朝鮮の蔚山城にいた清正は、日本への帰国に先立ち、肥後の百姓中に向けて「朝鮮出兵が始まって以来数年間、軍事動員などで苦勞をかけたので、年貢や労働の諸役を2、3年間は免除する」という方針を打ち出します。こうした方針を出した背景には、肥後領内の疲弊が挙げられます。朝鮮出兵では多くの百姓が非戦闘員として朝鮮へ渡り、物資輸送などに従事させられていたので、働き手を失った村々は相当に荒廃していた状況だったと思われます。実際の戦場となった朝鮮だけではなく、朝鮮出兵を下支えした肥後の村々も大きなダメージを受けていたのです。日本への帰国を目前に控えた清正が、領内農村の立て直しと復興を最重要課題と位置付け、それに向けて強い意欲を持っていたことがうかがえます。それと同時に、疲弊によって生じた不平不満が、清正に対する抵抗運動(一揆)となってあらわれることを未然に抑え込む意図もあったと思われます。

朝鮮からの帰途博多に立ち寄った後、慶長3年12月中旬に大坂に着いた清正は、伏見城の豊臣秀頼に挨拶を済ませ、しばらくは伏見の屋敷に滞在します。

慶長3年8月18日の豊臣秀吉死去後、中央の政治体制は徳川家康、前田利家ら五大老と呼ばれる実力者大名と、石田三成ら五奉行と呼ばれる政権の実務担当者が協力して秀頼を補佐する合議体制が敷かれていました。そして、慶長4年1月に秀吉の遺言に従い、秀頼は伏見城から大坂城に移り、前田利家も秀頼の後見役として大坂城に入ります。一方の家康は、伏見の屋敷で国政にあたります。家康と利家という当時誰もが認める実力者2人が、大坂と伏見にいたことで、かろうじて権力の均衡が保たれていましたが、実力的には突出した存在であった家康と、利家ら他の大老衆や五奉行との確執・対立は次第に深まりつつありました。この不穏な状況下、清正は家康に接近して家康支持を鮮明にします。この頃清正は、浅野幸長や福島正則ら親家康派の面々と伏見の家康屋敷を守衛するなど反家康派の軍事行動に備えるとともに、虎視眈々と勢力拡大を目論む家康と姻戚関係を結びます。清正は、慶長4年4月に家康の養女である清浄院を正室に迎え入れています。

実は、この権力争いには、朝鮮出兵で生じた諸将の不満や対立が複雑に絡み合っており、清正が家康に接近した背景には、これが大きな要因だったと思われます。まず、清正らは、蔚山城籠城戦の顛末について、当時軍目付であった福原長堯(三成の妹婿)らが、秀吉に対して虚偽の報告をおこなったことを糾弾します。清正らは、この長堯らの行動は義兄・三成が仕組んだものであると断定して、その怒りの矛先は三成に向けられます。そして、慶長4年3月22日に清正、鍋島直茂、毛利吉成、黒田長政の4人は、自己の正当性と三成や小西行長の偽りを主張する長文の連判状を作成して、直江兼続ら五大老の重臣に訴え出ます。ここでの清正の言い分は、主に行長の行動に関するものであり、彼の戦闘能力の低さと偽りにまみれた数々の行動を暴露します。清正と行長の不和については、捕虜として日本に連行され、慶長4年当時は京都や伏見に滞在していた朝鮮の朱子学者・姜沆が書き残した「看羊録」という記録に詳しく記されています。それによると、両者は帰国後に講和交渉の失敗や朝鮮から撤退した経緯について激しく言い争い、お互いに「怯懦」(臆病)と罵り合ったとされ、「議論はもつれにもつれ、反目はますます深まった」と当時の様子を観察しています。清正と行長は、秀吉に仕え始めた頃より互いに相容れない関係であったと一般的には言われていますが、実は、両者の関係悪化の原因は、朝鮮出兵の過程で生じたものでした。

慶長4年閏3月3日に三成らが後ろ盾としていた前田利家が死去すると、清正らはすぐに実力行使に出ます。利家死去の当日夜、清正をはじめ浅野幸長、黒田長政、福島正則、藤堂高虎、蜂須賀家政、細川忠興の7人が三成襲撃を画策します。事前に情報を得ていた三成は、佐竹義宣に護衛されて伏見城内の自身の屋敷に逃れ、清正らの計画は失敗に終わりますが、この事件により三成の立場は低下し、家康の政治的影響力はさらに強まります。

こうして関ヶ原へのカウントダウンが始まるわけですが、清正は慶長4年10月頃に肥後に帰国し、中央政局の情勢に目を配りつつ、領内の再建に着手します。

このコーナーは、大浪 和弥さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。

加藤清正の実像

7年におよぶ朝鮮出兵を終え、慶長4年(1599)9月頃に肥後に帰国した清正は、来るべく天下分け目の大戦に備えるため、荒廃した肥後領内の復興と朝鮮出兵で消耗した家臣団の再編成に取り掛かります。

〈19〉関ヶ原前夜

肥後に帰国した清正は、まず朝鮮出兵で戦った家臣団に対する論功行賞と軍団の再編成を目的として知行宛行をおこないます。朝鮮出兵中に戦死あるいは病死した清正の家臣がかなりいたと思われ、政情不安定な中央政局を考慮すると、家臣団の立て直しが急務の課題でした。また、この時期に清正は寺社の復興にも意欲を示しており、慶長4年11月29日に阿蘇社(現在の阿蘇神社)に対して出した書状の中で、豊臣秀吉を祀る豊国社の建立と、長く衰退していた阿蘇社の復興を約束しています。衰退していたとは言え、古くからの肥後における宗教勢力を抱き込むことで、統治をスムーズに進める意図があったと思われます。豊国社は翌年に立田山の中腹に完成しますが、加藤家改易後に社殿は破却されています。

さて、慶長5年に入ると清正が出す書状の数が極端に減少し、上半期の書状は現在まで1通も確認されていません。そのため清正の動向は不明と言わざるを得ませんが、この時期の一大事業として熊本城を築城している形跡が認められます。前年の慶長4年3月に清正の重臣が出した書状の中で「御城の普請に百姓たちが動員されているらしいが、これは清正様が出された方針に背くものであり、以ての外である。以後改めるように」と家臣たちを咎めています。前回述べたように、朝鮮出兵後に清正は百姓の休養政策を打ち出しています。これに違反して百姓を酷使することは支配の根幹にも関わる非常にデリケートな問題ですが、重要なのはその百姓たちが築城に使役されている事実です。書状の中で問題となっている「御城」とは、言うまでもなく現在の熊本城のことです。熊本城の築城開始時期については、関ヶ原合戦翌年の慶長6年が通説となっていますが、実際には秀吉が死去し、朝鮮出兵が終わる慶長3年後半には築城に着手していたと考えて間違いないでしょう。そして、後の史料などと合わせて考えると、慶長5年末には大天守をはじめとする熊本城の主要な建築群が完成していたと思われます。

慶長5年6月、会津の上杉景勝に謀反の動きがあるとして、徳川家康は大軍を編成して兵を東北に進めます。いわゆる会津征

伐です。これにより中央政局が大きく旋回し、この軍事行動が関ヶ原合戦の直接的な引き金となります。前回述べた清正らによる石田三成襲撃計画によって居城・佐和山城(滋賀県彦根市)に隠居を余儀なくされていた三成は、家康不在の機に乗じて打倒・家康を掲げて挙兵します。三成挙兵の呼び掛けに応じた、毛利輝元や宇喜多秀家ら全国の諸将が上方に集結し、10万人近い西軍を形成します。肥後にいた清正のもとにも西軍参加の呼び掛けがあり、7月には西軍の総大将・毛利輝元から即時上洛と西軍への参加を求める書状がもたらされています。

しかしながら、清正は早くから家康支持の立場を鮮明にしていたので、西軍からの誘いには一切耳を傾けることなく、九州における東軍の主力として九州での軍事行動に備えます。九州では清正のほかに、豊前中津(大分県中津市)の黒田如水、豊後木付城(大分県杵築市)を守る細川家重臣の松井康之・有吉立行が東軍として行動し、西軍に比べて兵力のうえでは不利な状況でした。そのため、清正は家臣の斉藤利宗を松井・有吉のもとに派遣して、不足物資の提供や情報の共有を約束し、互いの連携を強めています。

三成挙兵の知らせを聞いた家康は、会津征伐を中断して江戸に戻ります。家康は8月末まで江戸に滞りますが、清正は家康の周囲にも自身の側近や小姓を派遣して、情報を逐一清正のもとに報告させています。清正は、7月から8月中旬頃にかけて東軍本隊との合流に意欲を見せますが、結果的には九州に留まります。家康から九州における西軍大名領への侵攻を要請されていた一方で、軽率な軍事行動を自重するように命じられていました。そのような中、8月12日付の家康からの書状で、戦後の領地加増の約束と軍事行動解禁を取り付けます。この書状が9月10日に肥後の清正のもとにもたらされ、合戦近しと判断した清正は13日に陣立(部隊編成)を整え、出陣準備に着手します。

関ヶ原で東西両軍が激突したのが9月15日。奇しくも同日、清正も肥後で軍事行動を開始させ、豊後で友軍と交戦していた松井・有吉軍の救援に向かうため熊本城を進発します。

このコーナーは、大浪 和弥さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。



加藤清正の実像

関ヶ原で東西両軍が衝突した慶長5年(1600)9月15日。時を同じくして清正も、豊後(現在の大分県)で大友軍と交戦していた東軍方の松井康之・有吉立行の救援に向かうため隈本城を進発して、軍勢を豊後へと進めます。

〈20〉宇土城攻め

9月15日に4,000人の軍勢を率いて隈本城を進発した清正は、内牧・小国を経て、17日に豊後国引地村(現在の大分県玖珠郡九重町)に着陣します。しかし、そこで石垣原(現在の大分県別府市)の戦いで松井・有吉の軍勢が大友軍に勝利したという知らせを受けて、翌日には西軍・小西行長の居城・宇土城の攻略に転じます。清正は、宮地・木山・隈庄・松橋を経て、9月20日に宇土城から南へ約500m離れた栗崎山に陣を構え、戦況を見つめます。

清正は宇土城へ進軍する際、益城郡、宇土郡という小西領を通過してきたわけですが、この道のりの途中、清正は各地で3か条の禁止事項を記した禁制という文書を発給しています。益城郡と宇土郡の村々に出された禁制は、寺社宛のものも含めると現在10通確認されています。この禁制は、村々や寺社に対して清正が与えるわけですが、村人や寺社の行動を禁止あるいは規制するものではなく、敵領に進駐した自軍(ここでは清正の軍勢)に濫妨狼藉(戦時の略奪や放火)をさせないことを約束する文書です。これから占領する、もしくは占領した村々に対して、清正軍へ協力することを引き換えに軍勢の濫妨狼藉を禁止させ、地域住民の生命や安全を保障することを約束するもので、つまり清正が禁制を発給した村々は、清正が事実上占領して自領化(味方化)した地域となったと言えます。これには、小西領を占領したという既成事実を作ることと戦後の領地加増を確実なものとしようとした意図があり、同じく小西領であった芦北郡、さらには筑後(現在の福岡県南部)でも禁制を発給しており、戦後の領有に対する布石を打っています。城攻めだけではなく、このように清正が進軍の過程で敵領を接收していたことも見逃せない事実です。

さて、9月20日に宇土に着陣した清正は、先発隊として前日から宇土城攻めに取り掛かっていた家臣の吉村橘左衛門・加藤百介の軍勢と合流して、宇土城を取り囲みます。21日には宇土の城下町を焼き払い、じわじわと城攻めを進めています。城主・

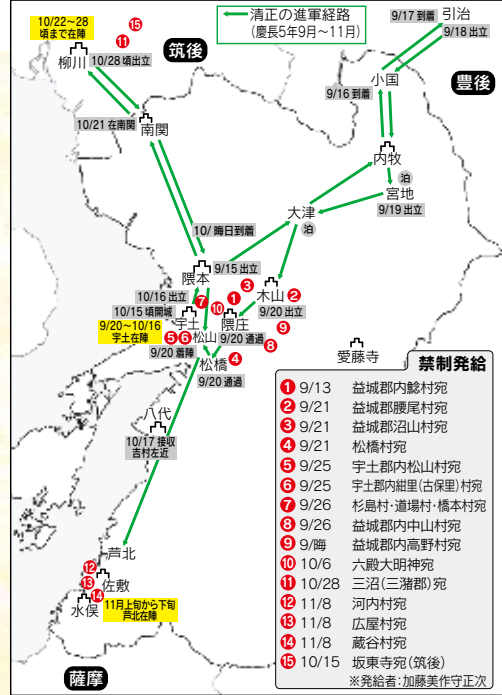
行長をはじめ小西軍の本隊は関ヶ原の合戦に参加しており、宇土城を守備する手勢は少ないと見ていた清正は、宇土城落城は時間の問題だと考えていました。しかし、城主不在にもかかわらず、町人・百姓を人質にして行長の弟・小西行景らが籠城する宇土城の抵抗は強く、その後1か月近く持ちこたえます。

そうした中、9月28日に清正は黒田如水からの書状で関ヶ原での東軍勝利を知らされます。知らせを受けた清正は、東軍勝利に満足する一方で、各地で東軍が快進撃を続けている中、長引く宇土城攻めに焦りを感じていました。西軍が敗走したことを交渉の材料として清正は宇土城に開城を迫りますが、外部と遮断されているため確かな情報を持たない籠城軍はなかなか開城に応じず、関ヶ原から宇土に戻った小西家臣の報告によって西軍が敗退した事実を知ることになります。籠城する小西家臣らの助命と引き換えに10月15日頃ようやく宇土城は開城します。

宇土城が落ちるやいなや、清正はすぐさま軍勢を率いて筑後に急行し、西軍に属した立花宗茂の居城・柳川城攻略に取り掛かります。開城の説得にやや時間を要し、10月28日頃まで柳川に在陣していますが、10月晦日には隈本城に帰陣しています。

破竹の勢いで西軍大名領を陥れていた清正や如水の残す標的は、薩摩の島津氏でした。11月1日に隈本城で陣立(部隊編成)を再度整えた清正は、軍勢を南下させて11月上旬に薩摩との国境・芦北に在陣しています。小西軍を救援するため薩摩から肥後へ出張っていた島津軍との間で小競り合いを演じますが、清正と如水が立花宗茂を通じて島津方へ降伏を勧告し、また徳川家康の意向もあり、大規模な戦闘に発展する前に島津攻めは中止され、ここに九州の関ヶ原合戦は幕を下ろします。

このコーナーは、大浪 和弥さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。



加藤清正の実像

徳川家康を総大将とする東軍の勝利に終わった慶長5年(1600)9月の関ヶ原の戦い。九州にあった東軍の勝利に大きく貢献した清正は、戦後家康より恩賞として領地を加増され、名実ともに大大名へと登り詰めます。

〈21〉肥後54万石の大名へ

慶長5年11月に薩摩の島津攻めが中止され、ここに九州での戦いは終結します。その後、清正は家康に年頭の祝儀と戦勝報告をおこなうため、12月に上方へと向かいます。年が改まって慶長6年正月、大坂城における年頭祝儀の席で家康による論功行賞が諸大名に正式に伝えられ、清正の領地加増も決定されました。関ヶ原の戦い直前に家康から「肥後と筑後を与える」との内約を得ていた清正でしたが、実際には相良氏に与えられた球磨郡を除く肥後一国だけが安堵されました。清正に与えられるはずだった筑後(現在の福岡県南部)は、関ヶ原の戦い後に行方を暗ませていた石田三成を捕縛する功績を挙げた田中吉政に与えられることになりました。清正は、当然肥後に加えて筑後も自分の領地になると思っていたようですが、後日隈本の重臣に宛てて出した書状の中で「筑後雖令相違候、不相替程二仕合共候間、可心安候」(筑後拝領の件は叶わなかったが、大したことはないので安心せよ)と述べていますので、こうなることはある程度覚悟していたのでしょう。しかしながら、戦いで働きに対して領地が大幅に増えたことは事実で、清正が言うように当初の予定とは事情が変わってしまいましたが、少なからず領地拡大の目的は達成されたことで不満な様子はあまり見せていません。

さて、ここで清正が実際に与えられた地域を確認しましょう。清正が家康より安堵された地域は、もともと自身が領有していた飽田郡、託麻郡、山本郡、合志郡、玉名郡、山鹿郡、菊池郡、阿蘇郡と西軍に属した小西行長の旧領である益城郡、宇土郡、八代郡、芦北郡です。球磨郡を除いた現在の熊本県全域にあたります。ここで問題となるのが天草郡です。通説では、天草郡も一旦は清正に与えられ、キリシタンが多いとされる天草は統治が難しいため、豊後国(現在の大分県)のうち海部郡、大分郡、直入郡との交換を願い出て、天草郡に替わってこの豊後三郡を新たに領有することになったと言われています。清正が天草郡ではなく、豊後三郡を新たな領地として与えられたことは事実ですが、領地交換の理由をキリシタンの多さに求めることには疑問が

残ります。キリシタンが多い地域は天草に限ったことではなく、小西行長の旧領には当時かなりのキリシタンがいたようです。イエズス会の宣教師ヴァリニャーノは、関ヶ原の戦い前年にローマへ送った報告書の中で「八代では2万5,000人が洗礼を受けた」と伝えています。人数の誇張を差し引いても、天草以外にも旧小西領には多くのキリシタンがいたことは間違いなく、そのような当時の状況下にあつてキリシタンが多いという理由だけで天草が除外されたとは考えにくいです。問題の天草郡は、唐津藩主・寺沢広高の飛地として与えられています。このあたりの天草領有の経緯を示す史料が残されていないため、不明な点が多いですが、清正が天草郡を放棄したと言うよりも、おそらく天草郡は当時長崎奉行を兼任していた寺沢に与えられることが先決したため、押し出される形で清正に豊後三郡が宛がわれたと考えたほうが良さそうです。

慶長8年2月に家康が征夷大將軍に任官して江戸幕府を開くと、翌月には清正がこれまでの「主計頭」から「肥後守」へと任じられ、肥後一国を領する大名の格と地位に相応しい官名を名乗り始めます。また、清正は領地が確定した後、領国経営の基盤となる検地に取り掛かり、着実に領内検地を進めていきます。そうして慶長9年9月に幕府に正式な検地帳を提出して、ここに肥後藩の石高がようやく確定します。検地帳には、肥後国内の石高約52万石と豊後三郡の石高約2万石、合わせて54万石が書き上げられ、これにより「肥後54万石」の礎が築かれます。次の大名家・細川氏にもこの数字は継承されることとなり、以後幕末まで肥後藩の公式な石高(表高)として通用します。

秀吉の家臣となり、わずか知行高120石からスタートした清正の武将人生。それから24年後、徳川家の治世下で名実ともに大大名にまで登り詰めた清正。次号では、清正の出世を象徴する熊本城築城の真相に迫ってみたいと思います。

このコーナーは、おおなみ かず や(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。

加藤清正の実像

平成19年(2007)に築城400年を迎えた熊本城。逆算すると慶長12年(1607)に熊本城が完成したことになりますが、熊本城の築城については大規模な城郭普請だったにもかかわらず、築城時期をめぐっては諸説あり、今なお不明な点が残されています。

〈22〉熊本城築城

清正が築城した熊本城は、西南戦争の熊本城攻防戦がおこなわれる直前の明治10年(1877)2月19日に原因不明の出火で焼失してしまいます。現在の熊本城天守閣は、昭和35年(1960)に熊本国体と築城350年を期に復元されたものです。

さて、通説では熊本城の築城開始時期は、関ヶ原合戦翌年の慶長6年(1601)とされています。これは、清正死後に成立した伝記「続撰清正記」の記述が根拠となっていますが、現在の研究では築城開始時期はこれよりさらに遡ると言われています。しかし、具体的な築城開始時期については、いくつかの見解があり、はっきりとした時期は今でも確定していません。これは、築城に関する史料の少なさにも因りますが、現在の熊本城と旧隈本城(現在の熊本医療センターと熊本県立第一高校一帯)の隣接した2つの城があったことが問題をさらに複雑にしています。清正は入国当初より現在の熊本城を居城としていたわけではなく、それまで隈本の拠点的城郭だった旧隈本城に入城しています。以下、混乱を避けるため現在の熊本城を「熊本城」、清正が最初に居城とした旧隈本城を「隈本城」と表記します。

隈本城については、建造物などの全体像を伝える史料が残されていないため、残念ながら当時の様子は窺い知れませんが、豊臣秀吉が「名城」と評すほど堅固で大規模な城郭だったようです。現在では部分的に残存している石垣と、「古城」という地名が当時の名残りをわずかにとどめています。前領主・佐々成政もこの隈本城に入城していますが、着任早々に国衆一揆が発生し、その責任を問われてわずか半年ほどで解任されています。そのため普請らしい普請はほとんどおこなわれていませんが、成政の跡を受けた清正は隈本城に入城後、ある程度の普請をおこなっていた様子が史料から窺えます。

城普請に関する清正の書状は、現在20通ほどが確認されます。最も早い時期の書状は、肥後入国の翌々年にあたる天正18年(1590)のもので、堀や石垣の普請を指示している内容です。その後も朝鮮出兵時期を含め毎年のように城普請に関する書状が散見されますが、いずれも断片的で、しかもそれらが隈本城普請に

関するものなのか、新たな熊本城普請に関するものなのかの判別が難しく、議論が分かれるところです。しかし、清正の書状には早い時期から「本丸」、「てんしゅ」、「広間」などの文言が見られます。このことから、清正が肥後入国直後から隈本城を放棄して、新たな居城として現在の熊本城の築城に取り掛かっていたとする見方もありますが、天守閣をはじめ熊本城の主要な建造物が姿を現し始めるのが慶長5年(1600)以降であることを考えると、清正が肥後入国後に手を加えたのは隈本城だったと考えられます。肥後入国後から朝鮮出兵中の文禄年間までは隈本城の増改築を中心におこなわれ、重臣屋敷の新規建設や既存の建造物に手直しを加えていく過程で城域が手狭となり、次第に茶臼山全体へと城域が拡張されていったものと思われます。実際、清正は朝鮮出兵中の文禄3年に国元の重臣に送った書状の中で、櫓の取り壊しと仕直し(新規建設)や新たな地割りを指示しています。このように、従来の隈本城を修築していく中で生じた物理的、空間的な課題に対処するため、城郭規模を現在の城域である北東へと拡大させ、新たな城郭拠点となる現在の本丸へと段階的に移行していったものと考えられます。おそらく、文禄4年(1595)頃から本丸移転構想が持ち上がり、慶長年間に入り、現在天守閣が聳える本丸整備に着手したのではないのでしょうか。

では、その本丸に建設する新たな天守閣の普請はいつ頃始まったのでしょうか。重臣に宛てた慶長5年10月26日付の書状の中で、薩摩の島津攻めに向かう黒田如水を「新城」に迎え入れるため、置敷きなど天守閣内部の作事を急ぐよう指示しています。つまり、慶長5年10月頃にはすでに「新城＝天守閣」が大方完成しつつあったことが分かります。いくつかの史料や期間的な問題を併せて考えると、新天守閣の築城開始時期は、朝鮮出兵終了直後の慶長3年末から翌年初頭に求めることができ、完成までにおおよそ2年を要したことになります。そうして、慶長12年頃までには本丸御殿をはじめ主要な櫓群や石垣、城内の重臣屋敷も整備され、我々が現在目にする熊本城の全容が固まったと言えるでしょう。

このコーナーは、おとなみ かずや(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。



加藤清正の実像

慶長8年(1603)に征夷大將軍となった徳川家康は、同10年に息子・秀忠に將軍職を譲った後も大御所として政治の実権を握っていました。世はすでに徳川の治世となっていました。大坂城には豊臣秀吉の息子・豊臣秀頼とその母・淀君が健在で、家康にとっては無視できない存在でした。

〈23〉二条城の会見と清正の死

慶長5年の関ヶ原の戦い後、豊臣家はそれまで領地としていた全国220万石の直轄地を家康によって召し上げられ、畿内の一部65万石を与えられ、一大名に転落します。しかしながら、その政治的地位は徳川家と並ぶほどに高く、特に親豊臣系の大名に対しては依然として強い影響力を持っていたと考えられます。この時期の政治体制を「二重公儀体制」と位置付けて、江戸の徳川家と大坂の豊臣家という二つの公儀(政治権力)が併存していたと見る研究者もいます。このような他の大名家とは別格に位置する豊臣家に対して家康は、慶長8年に孫娘の千姫を秀頼に嫁がせるなど、豊臣家との融和を図り、安定的な関係を築きます。その後、家康は秀頼との面会を度々求めますが、家康に対して警戒心を抱く母・淀君の反対でなかなか実現しなかったと言われています。

しかし、慶長16年3月に後水尾天皇の即位行事のため上洛した家康は、大坂城の秀頼にも上洛を求め、ついに3月28日に二条城において両者の対面が実現します。従来、この会見では徳川家の政治的優位性を誇示するため、家康が秀頼に対して臣従の態度を強制したと言われていますが、実際には家康は秀頼を厚遇する態度を見せています。これは両家の対等関係や融和を示すことで親豊臣系大名、言い換えれば反徳川大名を懐柔する意図があったようです。

この歴史的会見に、同席を許された数少ない大名の一人として清正も名を連ねています。この会見時の清正の行動については、清正死去直前のハイライトとしてよく知られていますが、実際にはどのように会見に関わったのでしょうか。後世にできた伝記「清正記」には、大坂城から京都へ上る淀川の兩岸を清正と浅野幸長の家臣たちが厳重に警備して、清正は二条城に着くまで秀頼の側を少しも離れずに護衛したと書かれています。しかし、同時代の史料には、清正は鳥羽で秀頼を出迎える使者として家康により派遣された当時9歳の徳川頼宣(家康10男)の後見役として名前が見えます。清正は、大坂から京都の二条城まで終始秀頼に寄り付き添っていたわけではなく、頼宣の御供役とし

て二条城の会見に参加を許されていたことが分かります。つまり、清正は秀頼を護衛する豊臣家側の人物としてではなく、あくまで徳川家側の人物として会見に同席したわけです。頼宣は清正の娘婿に当たる人物ではありますが、家康が会見に親豊臣系大名の筆頭とも目される清正を選んだ背景には、やはり徳川家・豊臣家双方に目配りができる人物は清正しかいないという家康の政治的配慮があったのでしょう。当時の清正が重要な政治的立場にいたことが良く分かります。当時、12年ぶりとなる秀頼の上洛は京都の民衆の中でも非常に話題となり、その行列見たさに市中は騒然となったようです。秀頼が乗る駕籠を群集や見物人から守るため、清正は鳥羽から二条城までは秀頼近くにいて、護衛していた可能性は十分にあります。会見終了後に秀頼は大坂への帰途、伏見にある清正の屋敷に立ち寄り、饗応を受けています。おそらく、秀頼が淀川を下る船に乗るまでは、清正が秀頼護衛の任を担ったのでしょう。結果的に、これが清正最後の大仕事になってしまいます。

会見終了後、清正はしばらく京都に滞在して、茶会や能鑑賞を楽しんだ後、5月2日に大坂を出航して肥後に向かっています。肥後へ向かう船中で発病したとも言われていますが、萩藩毛利家が収集した情報によれば、清正は5月15日に熊本に到着した後、27日に熊本城の大広間で発病したとされています。病名は定かではありませんが、突発的な発病と「舌不自由」などの症状が見られたことから脳内疾患だったと推測されます。治療の甲斐もなく、慶長16年6月24日に自身が築き上げた熊本城で50年の生涯に幕を閉じます。清正死去直後から家康による毒殺説も噂されていたことが、イエズス会宣教師の報告書から窺えますが、大坂を出てから症状が出るまでかなりの時間が経っているため、毒殺の可能性は極めて低いと言わざるを得ません。

死後、熊本城下を西から見下ろす中尾山中腹(現在の本妙寺山)に廟所が造営され、清正の亡骸はそこに葬られました。

このコーナーは、大浪和弥さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。



加藤清正の実像

慶長16年(1611)の清正死去後、息子・忠広が清正の跡を継いで肥後を治めますが、寛永9年(1632)に改易され、代わって豊前小倉より細川忠利^{ただとし}が入国します。

これにより加藤家は歴史の表舞台から姿を消すことになりますが、それは清正第2の人生の始まりでもありました。

〈24〉清正公信仰 ― 神になった清正 ―

天下人と言われる豊臣秀吉や徳川家康が、死後神格化されて人々の信仰の対象となったことはよく知られています。前者は豊国大明神^{とくに たいみょうじん}として、後者は東照大権現^{とうしょうだい こんげん}として江戸時代から現在まで人々の信仰を集めています。江戸時代には、藩祖^{はんそ}や功績^{こうしん}のあった藩主を死後顕彰^{けんしょう}して、家臣たちに崇拜^{すうはい}させることは一般的におこなわれていました。しかし、天下人でもない、一地域の大名に過ぎない清正を神格化して信仰する、いわゆる「清正公信仰^{せいしんこう}」が日本中に広がったことは、非常に稀な歴史的事象だと言えます。

清正公信仰は、いつごろどのようにして始まり、いかにして広がっていったのでしょうか。まず、清正死後50年ほど経った頃に代表的伝記である「清正記」と「続撰清正記」が成立しています。史実とかけ離れた部分も少なくありませんが、この2つの伝記で描かれている清正像が、今なお私たちが抱く清正イメージの原型となっています。死後50年という時間の経過を考えると、生前の清正を知る人が次第に減りつつあった時期で、清正の事績や記憶というものが忘れ去られてしまう危惧が関係者にはあったのではないのでしょうか。そのため、死後しばらくして近親者や家臣たちの中で、清正を供養するとともに、藩祖・清正の業績を顕彰する動きが始まります。それが次第に神格化へと発展し、これが清正公信仰の萌芽^{ほうが}になったと思われます。加藤家の跡を引き継いだ細川家も清正の功績を称え、菩提寺である本妙寺^{ほんたうじ}を庇護^{ひご}しています。通常、新たな領主は前政権や前代の為政者^{せいしや}を否定することから政治をスタートさせますが、細川家の場合はその逆です。加藤家に対しては、江戸時代を通じて敬意を払い続け、寛大な姿勢を見せています。このことも、熊本に清正公信仰が根付いた大きな下地になったと思われます。

清正公信仰が隆盛を見せ始めるのは、江戸時代後半からです。享保元年(1716)に清正のひ孫にあたる徳川吉宗が第8代将軍となり、同16年には、前述した「清正記」を閲覧しています。このことが改易された加藤家の名誉回復につながり、その後、世間では清正を扱った芝居が続々と登場して、その波乱に満ちた人生に江戸や大坂の庶民たちが酔いしれます。一方、清正公信仰の一大拠

点となった熊本の本妙寺では、宝暦10年(1760)におこなわれた清正150回忌法要を境に盛り上がりを見せ始め、文化7年(1810)の200回忌法要では、本妙寺周辺だけでなく、熊本城下一帯は全国からの参詣人^{さんぎにん}やひと儲けしようとする商売人^{あらい}で溢れ返り、空前絶後の賑わいを見せます。ここにきて清正公信仰の熱狂は最高潮に達します。人々は、商売繁盛^{やまいよ}や病除け、果ては芸事の上達まで様々な願いを神様・清正に託しました。幕末には、時代を反映するかのよう^{がう}に、武運長久^{ぶうんちやうきう}や攘夷成就^{じやうい じやうしゆ}などの祈願も加わり、力強い武者姿の清正を題材とした浮世絵も多く製作されました。

明治時代になると富国強兵のスローガンのもと政府が押し進める大陸進出のシンボルとして、朝鮮出兵で活躍した清正が再びクローズアップされます。軍国主義が色濃くなる明治時代後半から昭和にかけては軍神として兵士や民衆の信仰を集めます。この時代の小学校の国定教科書や唱歌にも「忠君愛国」の理想的な人物像として清正が取り上げられ、戦争へと突き進む国家の教育政策に利用されることになります。

清正公信仰は当時の社会状況と密接に関連しており、社会の変化やニーズに応じて、その信仰形態や清正像も大きく変容しています。特に江戸時代と明治時代以降では、その性格が大きく異なります。清正公信仰の変遷^{たど}を辿れば、その時々^{とき}の社会の変化が写し鏡のように見えてきます。言い換えれば清正公信仰の歴史は、日本社会の歴史そのものとも言えます。現在の清正像は、ある日突然出来上がったものではなく、変容しながらも長い歴史の中で人々によって形成されてきたものであり、これからも変化し続けていくことでしょう。

2年間全24回にわたる連載も今回で終了します。

タイトルにもあるように、本連載では伝説的英雄・清正ではなく、可能な限り当時の史料に基づいて清正の実像を描こうと心がけました。清正さんから「まだまだ実像には迫っとらん」とお叱りの声が聞こえてきそうですが、これまでとは少し違った人間・清正を提示できたのではないかと思います。本連載が、より魅力的で新たな清正像を、これから市民の皆さんで作り上げていく1つのきっかけになれば幸いです。

2年間お読みいただき、ありがとうございました。

このコーナーは、大浪^{おおなみ}和弥^{かずや}さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。

